

# 温泉地域研究

第18号

2012年3月

## 論文

- 菅江真澄が見つめた北東北の温泉文化・信仰  
 ..... 石川理夫 (1)
- 動物の発見伝説に係る温泉の泉質  
 - 既存文献と河野調査データの解析を通しての考察 -  
 ..... 甘露寺泰雄 (13)

## 研究ノート

- タイ・サンカンペーン温泉における温泉観光開発  
 ..... 浦達雄・小堀貴亮・中山三照・ポーバンティップ (25)
- 3.11 東日本大震災後の北東北の観光状況と温泉地経営  
 ..... 谷口清和 (31)

## シンポジウム

- 東日本大震災復興支援 ..... (37)

## 書評

- 小関信行/アンゲラ・シュー著：  
 『クアオルト・Kurort 入門 気候療法・気候性地形療法入門』  
 ～ドイツから学ぶ温泉地再生のまちづくり～ ..... 山村順次 (49)
- 山村順次著：『温泉地調査報告集(1)(2)』 ..... 浦達雄 (50)

## 温泉地情報

- どこまでやれるか！省エネでコスト削減－花山温泉・薬師の湯－  
 ..... 西口正敏 (51)
- アーヘン温泉訪問記 ..... 赤池勇治 (53)

- 学会記事 ..... (55)

日本温泉地域学会

## 菅江真澄が見つめた北東北の温泉文化・信仰

### Japanese Hot Springs: Culture and Beliefs in the Northern Tohoku District through the Descriptions of Masumi Sugae in the Edo Period

石川理夫\*  
Michio ISHIKAWA

キーワード：菅江真澄 (Masumi Sugae)、北東北地方 (northern Tohoku regions)、温泉文化・信仰 (hot springs culture and beliefs)、湯の神 (god of hot springs)

#### 1 研究課題と方法

##### (1) これまでの菅江真澄研究と温泉文化(史)

江戸時代中後期の本草医学・国学・民俗地誌学者にして歌人であった菅江真澄の生涯にはなお不明な点があるが、1754(宝暦4)年三河国(愛知県)に生まれ、本名・白井秀雄。1782(天明2)年に木曾路の旅に出ていったん戻った後、1783(天明3)年から陸奥をめざす旅に出る。信州、越後、出羽国を経て秋田に入り、北東北地方から北海道南部まで広く遊覧。津軽から1801(享和元)年に再び秋田に入り、秋田藩主佐竹義和の知遇を得て地誌編さんを委ねられ、秋田の地で1829(文政12)年その生涯を終えるまでの46年間に、膨大な旅日記・地誌・随筆・雑纂・図絵集を残した。それらは主に国重要文化財指定『菅江真澄遊覧記』(77冊12帖、辻家蔵)と秋田県文化財の『菅江真澄著作』(46点、大館市中央図書館蔵)にまとめられている。

東北地方の歴史・文化、社会全般にわたる総合的な研究、なかでも民俗学者の赤坂憲雄が提唱してきた「東北学」において、こうした足跡を残した菅江真澄研究の重要性は広く認められ、論じられてきたことである。一方、それ以前から菅江真澄終焉の地である秋田県

を中心に各地で在野の人々によって研究会がつくられ、菅江真澄の研究に取り組んできた。代表的なのが、戦後まもなく民俗学研究者の内田武志が柳田国男指導のもとに設立した「菅江真澄研究会」で、没後の1981(昭和56)にそれを継承するかたちで再設立され、研究誌『菅江真澄研究』を定期刊行して今日に至っている。

菅江真澄が北東北地方を中心に多くの温泉地を訪れ、かつ温泉について幅広く言及し、説明付で図絵にも描いていることは知られている。しかしながら、菅江真澄研究が多分野にわたっているとはいえ、菅江真澄による温泉(地)への言及、観察内容を検証し、なかでも当時の湯治文化や広く温泉文化、温泉信仰のありようを考察していくような研究は途上にもついでない<sup>1)</sup>。したがってその端緒を開くこと、なかでも菅江真澄がつぶさに記録した北東北地方の湯治・温泉文化と信仰の考察を通じて、江戸時代に形成されていく日本の温泉文化・信仰全体に通底するものをみいだすこと、本稿の研究課題はまさにその点にある。

##### (2) 研究方法について

菅江真澄が全著作を通じて一体どれほどの

\*温泉評論家 (Critic of Hot Spring)

表1 菅江真澄と北東北の出会い

1783 (天明 3)	2月末、故郷の三河国(愛知県)を出発。信州へ向かう
1784 (天明 4)	6月、信州から越後、出羽国を經由して秋田に入る
1785 (天明 5)	秋田から津軽(青森県)、南部藩領(岩手県側)を行き来する
1788 (天明 8)	宮城から津軽半島を経て、蝦夷(北海道南部)に渡る。蝦夷地滞在
1792 (寛政 4)	蝦夷から下北半島に戻り、下北を巡る
1795 (寛政 7)	津軽地方を巡る
1801 (享和元)	津軽を離れて秋田に再び入る。以後秋田を巡遊する
1811 (文化 8)	秋田藩主佐竹義和に謁見し、出羽6郡の地誌作成の内命を受ける
1813 (文化 10)	地誌編さん・調査を始める
1829 (文政 12)	秋田・仙北郡地誌編さんの旅の後、7月に角館にて死去

(注)『菅江真澄遊覧記』(平凡社東洋文庫)の年表をもとに筆者作成。

温泉(地)に言及しているのか確定されていない現状で、かつ著作はデジタル化されていないため、研究方法としては、まず愚直に菅江真澄の著作から温泉(地)へ言及した記述や図絵を拾い出すことから始めた。主な対象は、内田武志と宮本常一が共同編さんして1971(昭和46)年より刊行を始めた『菅江真澄全集』全14巻(うち別巻2巻。未来社刊)である。現代語訳の内田・宮本編『菅江真澄遊覧記』(全5巻。平凡社東洋文庫)も、収録されている足跡地図と年表、菅江真澄著書目録が参考になった。

なお、菅江真澄と温泉に関しては、菅江真澄研究会の田口昌樹が『「菅江真澄」読本4』に「温泉-全国編-」として、菅江真澄が訪れた信州の「湯の原」(長野県美ヶ原温泉)と青森県浅虫、下風呂、湯段温泉、「獣の滝湯」(金木町)、北海道の「白別」(白別温泉)、「妻の湯」(五厘沢温泉)の7カ所を紹介している<sup>2)</sup>。ほかに、菅江真澄を温泉で開眼して温泉好きになった文人として紹介した本がある<sup>3)</sup>。さらに一つ、菅江真澄はたびたび持病に悩まされているが、これを「わらわやみ(熱病の瘡[おこり]の別名との説)」であるとして、「持病のわらわやみには温泉が最適だと真澄は思っていたようだ」とする説が菅江

真澄研究会の佐藤久治から出たことがある<sup>4)</sup>。

## 2 菅江真澄と北東北の温泉(地)

### (1) 菅江真澄が言及した温泉地

はじめに菅江真澄(以下、真澄と略す)は北東北地方を中心にどれほどの温泉(地)について言及しているのか。真澄が言及、記述した温泉(地)は三つの時期と該当地域に区分できる。

- 1 北東北に到る旅の途中  
該当地域：長野・山形県
- 2 日記等に記した北東北ほか  
該当地域：岩手・青森・宮城・福島・秋田県、北海道
- 3 秋田での地誌編さん対象  
該当地域：主に仙北・雄勝・秋田郡

真澄が言及した温泉(地)には、真澄が実際に訪れた所と、土地の人から聞いた温泉(地)名を列挙したり行かないで言及しただけの所の両方が含まれる。また、当時すでに泉温が低下するなどして利用されなくなった温泉場、湯の枯渇や地震、地滑りで泉源が埋もれて廃湯になった所についても言及しているが、どちらも旧温泉地として言及数に含めた。そうした旧泉源や廃湯の中には、今日近

くに存する温泉地に含まれるものがあるかもしれない。そうしたダブりの可能性や見落としを含めて、確定とは言い難いが、おおよその言及数が浮かび上がった。その数77カ所に及ぶ(表2)。

## (2) 菅江真澄の温泉記述の特色

それでは真澄はどのように温泉(地)について記述、記録したのか。そしてどのような特色が見られるのか。

真澄の温泉(地)記述の大半は日記と地誌にあり、ごく一部は随筆にある。さらに解説を付けて図絵に描いた温泉地も多く、温泉場全体の情景やディテールがつかめる。たとえば、青森県下風呂(しもふろ)温泉、秋田県の岩倉温泉、「こまたの温湯」と記した杣(そま)温泉、長く逗留して土地の人々や湯治客と交流した大滝温泉、噴湯状況をよく描写した小安温泉などである。地誌に記したのはもちろん秋田の温泉(地)で、地誌の性格上、事項別に切り口を分けて日記以上に詳細な記述が多い。真澄の温泉記述の特色を三つ挙げる。

一、45年の長きにわたって北東北地方に

滞在、巡遊して土地の人と交流し、温泉と温泉文化への共感が芽生えたため、同時代の他の文人・紀行家と違って予断偏見なく観察、記録している

二、真澄の膨大な関心対象の中でも温泉



図1 「こまたの温湯」秋田県杣(そま)温泉  
(注)1802〔享和2〕年『雪の秋田根』。

表2 菅江真澄が言及した現・旧温泉地名(道県別・所在地)

長野県	浅間、美ヶ原、山辺、葛、中房、※「戸隠鬼無里の冷泉」(『くめじの橋』)
福島県	熱塩＝「示現寺境内有温湯」(『かぜのおちば 一』)
宮城県	花山、温湯
山形県	温海
岩手県	須川＝酸川・酢川(『小野のふるさと』、『雄勝郡』)
北海道	五厘沢、白別、平田内、見市、恵山、川汲、鹿部、留ノ湯。※イヤシナキの湯
青森県	嶽、湯段、温湯、板留、大鱈、蔵館、碓ヶ関、湯の沢＝「鬼湯」、猿(深浦)、追良瀬山(深浦)、下湯(青森)、沖浦(黒石)、二升内(黒石)、要目(黒石)、切明、大川原、酸ヶ湯、田代、浅虫、馬門、下風呂、赤川、恐山、湯坂、湯野川、ししの滝湯(金木)。※笹内(岩崎)、湯の沢(市浦)、根子(平館)、鷲の湯(蠣崎)、福浦の出湯(佐井)
秋田県	湯瀬、大湯、湯ノ沢(藤里)、杣、大滝、湯本、笠矢崎(男鹿)、岩倉、泥湯、川原毛、小安、大湯、湯の岱(雄勝)、椽湯(雄勝)。※湧元、湯の尻(以上男鹿)、湯目内(梅内)、湯の沢(白沢)、湯の台(鷹巣)、幸左衛門湯、湖中の温泉(琴丘)、滝ノ沢、湯田(強首)、湯ヶ股(秋田郡新城ノ庄)、秋田郡山内荘「松原村ノ温泉」、仙北郡「由田村ノ温湯」

(注)筆者作成。※以下は、当時利用されていないか廃湯になった温泉場や泉源の名称。

は希少・貴重な自然現象で、土地の生活風俗・文化の重要な要素として民俗地誌学の基軸の一つにすえている

三、温泉観察の対象がとおりにいっぺんではなく幅広い。源泉と湧出状況に始まり、源泉の性状、温泉の産物、効能、利用湯坪の数や利用状況、歴史や温泉にまつわる事件、温泉信仰のありようにまで及ぶ。

三番目の特色に挙げた、観察眼に優れた真澄の克明な記述をとおして、今日なお変わらない源泉の性状がつかめる好例が青森県恐山温泉である。1792（寛政4）年10月、蝦夷地から下北半島に戻った真澄は大湯と新湯、二つの共同湯が並ぶ下風呂温泉を通り、10月30日に「うそり山、おそり山」という恐山に上る。恐山温泉は「山の湯」と呼ばれていた。

「こゝしき巖のそびえたる辺りより流れ出る湯の色は、山藍をこき流したるが如く、その匂い、え耐えしのびもあへねば…（中略）…冷の湯、古滝の湯、薬師の湯、山蔭に行けば花染の湯とて、薄きくちなし色に湧き出、はた、しん瀧という湯の根（源泉）も奥山にありとか…（中略）…この山に湯浴みに至らん人は、煙草の葉を以て黄金、脇差しの類、金物はみな包みたり」（日記『牧の冬枯』）

恐山の各所から湧く温泉の泉質は酸性-硫化水素泉で主に青白色だ。真澄以前すでに「花染湯」と称されていた<sup>5)</sup>「花染の湯とて、薄きくちなし色に湧き出」とは、昨今の温泉ガイドの月並みな紹介文に勝る絶妙な表現である。境内地に点在する湯小屋の一つ、花染湯は含まれる硫黄分が析出し、白濁した湯の中に淡く黄色を今もたたえている。また、硫化水素によって金属が変色するのを避ける手立てを湯治客が講じていたこともわかる。

二番目の特色については、1814（文化11）年の地誌『雪の出羽路 雄勝郡二』所収「温泉の産物」と「小安温泉試功考」を見よう。前者は、「江土（えづち）とて水硫黄（ゆの



図2 青森県下風呂温泉

（注）1793〔寛政5〕年『牧の朝露』。

はな）の気雑（まじり）たる色黒き土也、そは湯泉の底よりとりて湯土と云べきを、訛りて…」（引用文かっこ内の読みや説明は筆者。以下同）と温泉の産物について記す。後者では温泉の成分、性状や効能に言及している。真澄は薬草、医薬だけでなく鉱石への造詣も深かったようだ。

「温濤黒色にして気味鹹く、明礬ありて涌き出るならん。南風吹きて雨を催すときは湯甚だ温く、北風晴れわたるときはかならず寒（ぬる）し、年として変化あり。此の温泉は有馬に並び、其功を試みし人…（中略）…脚氣、頭痛、手足の筋引張り…（中略）…疝氣をいやし、はらめる女此の湯にあたゝまりて安産せし事多しといへり」（「小安温泉試功考」）

### 3 江戸中後期の温泉行と記述の状況

#### (1) 温泉探訪と温泉紀行文の広がり

次に、真澄の温泉巡遊と記述をそれ以前や同時代と比較対照し、位置づけを考えたい。

真澄が北東北を巡り、著作に記した時期は1784（天明4）年から1829（文政12）年。江戸時代中後期にあたる。ただし、発表され

たのは後世である。この時期、旅はより活発に広域化し、初期の旅の主役であった武士、文人、修行僧、商人のみならず、湯治目的や寺社詣でを理由に一般庶民まで及び始めた。並行して、箱根、熱海、有馬、伊香保、草津など著名温泉地を中心に温泉紀行、温泉案内記が数多く刊行されていく。

北東北の温泉地への言及紹介に関してはまだ乏しい。それでも、わが国初の“秘湯ブーム”到来の時期だったのではないかと筆者が考える江戸中後期の温泉紀行文には秘湯紹介の要素があり、鈴木牧之の『秋山記行』が紹介した信越国境の秋山郷や、奥州一北東北の温泉地が紹介されるようになった。

奥州の秘湯探訪の紀行文では、吾妻山中の今も秘湯感漂う山形県五色、滑川、姥湯温泉を探訪し、秋田県の湯瀬、大湯温泉まで訪ね

た勤皇家・高山彦九郎による1790（寛政2）年刊の『北行日記』がある。

また、幕府巡見使に随行した地理学者の古河古松軒が書いた『東遊雑記』も、奥州一北東北の多くの温泉地に言及している。しかし公務旅行という性格もあってか“上から目線”、冷ややかなまなざしで現地の温泉（地）風俗を見下した所があって、真澄とは違う。

真澄に先駆けた時代から同時代にかけて、他の温泉記述は北東北の温泉（地）をどれほど取り上げているか、表3に挙げる。真澄が言及した温泉地名を挙げた先の表2と対照してみると、真澄の徹底ぶりがわかるであろう。

### (2) 温泉医学が芽生えた時代

もう一点、時代背景として注目すべきは、江戸中後期すでに温泉療養への科学的考察と温泉医学が芽生えていたことである。

表3 菅江真澄に先立つ時期～同時代に言及された北東北の温泉地

著者・著作	刊行年・時期	取り上げられた温泉地
香川修徳 『一本堂薬選続編 温泉』	1738（元文3）	台、鶯宿、繫、松川、金田一、湯田、夏油、国見（以上岩手）。大湯、湯瀬、熊沢（以上秋田）。下風呂、恐山、浅虫、大鰐、蔵館、温湯、板留、湯段、酸ヶ湯、切明、嶽、碓ヶ関、沖館、※鶯湯、※田名部郡の冷湯二泉（以上青森）など27カ所
古河古松軒 『東遊雑記』	1788（天明8）	浅虫、大鰐、蔵館、岩木山麓の温泉（以上青森）。大湯、湯瀬、八幡平の温泉（以上秋田）
高山彦九郎 『北行日記』	1790（寛政2）	大湯、湯瀬（以上秋田） 台、鶯宿、繫、松川、金田一、湯田、夏油、国見（以上岩手）。大湯、湯瀬、熊沢（以上秋田）。
八隈蘆庵 『旅行用心集』	1810（文化7）	下風呂、恐山、浅虫、大鰐、蔵館、温湯、板留、湯段、酸ヶ湯、切明、嶽、碓ヶ関、沖浦、※下湯、鶯湯（以上青森）
他の温泉紀行・温泉記	主に江戸後期	『鶯宿温泉志』、『奥州嶽温泉紀行』など

（注）筆者作成。※は旧温泉地・廃湯。現温泉地内の複数泉源を列举したものは1カ所にまとめた。

先駆的には、江戸前中期の1713（正徳3）年に貝原益軒が『養生訓』を著して、洗浴と湯治に言及していた。その中で益軒は病に効く温泉、効かない温泉について述べている。

1738（元文3）年には、古医方（こいほう）医・後藤長山の門弟で儒医・香川修徳がわが国初の温泉医学書『一本堂薬選続編 温泉』を著した。同書は温泉の効能と性状、飲泉や

入浴法まで詳しく論じ、北東北地方では旧温泉地を含む27カ所の温泉地名を列举している。これは江戸後期の1810（文化7）年刊で、わが国初の温泉・湯治旅行案内『旅行用心集』が挙げた北東北の温泉地名26カ所とほぼ合致しており<sup>6)</sup>、その基になったと思われる。

おそらく真澄にとっても、『一本堂薬選続編』が取り上げた北東北の温泉地は巡遊の際

の指針となったのではないか。そして成分や性状と特徴、さらには効能にまで言及していた真澄の記述には、香川修徳はじめ先人らの著作から得た幅広い温泉知識が素地としてあったことが推測し得る。

## 4 北東北の温泉文化・信仰

### (1) よみがえる北東北の温泉場情景

真澄の著作からはディテールまでビジュアルに描いた図絵によって、全体を俯瞰したごとく温泉場の概観、基本的な構造が明らかになる。そして泉源の位置や数、湧出する源泉の状態に始まり、浴舎の配置と湯坪の数、人々がどのようにして温泉場を訪れていたのか、さらには湯坪で入浴中の会話や宿での湯治客同士の交流模様や娯楽、温泉や湯治にかかわる習俗・慣習、温泉への畏敬の念、温泉を活用した食に至るまで、すなわち当時の北東北の湯治文化、広く温泉文化のありようが浮かび上がってくるのである。

一部を先に引用した青森県恐山温泉では、賽の河原が広がる信仰の霊場でかつ癒しの湯治場でもある情景を真澄はこう記す。

「湯浴み人の仮屋あまた建て並べ、厠、尿する所も細き流れの上に造り架けたれば、こゝかしこに、家はいと多く、さゝやかながら並びたり…（中略）…雲の上るがごとく、石の油の燃え出る煙、湯の煙立ち交じり…」（前出『牧の冬枯』）

「湯浴みをするには、女は紺の湯まきをして大勢並び、頭に手拭をかけ、大きなかいけ（手桶）で湯を盛んにすくい、これをかぶるといって、百度も千度も頭に打ちかける」（日記『奥の浦うら』）

ちなみにこの記述ひとつからも温泉文化史上、“日本ではハダカ入浴が伝統であった”といった説が短絡ぶりがわかる。「ハダカ」イコール全裸とは限らない。早くに伝来した『仏説温室洗浴衆僧経』が「內衣」着用の入浴作法を律してきたように、東北最北端の湯治場でも女性は「湯まき」を身に着けて入浴

していたことがうかがえるのである。

真澄はまた、青森県浅虫温泉を1788（天明8）年と1796（寛政8）年の2回訪れている。日記『外が浜つたひ』に記した第1回目は、老村長が津軽の温泉地名を数々挙げる問答があった。当時の様子を現代語訳で見よう。

真澄は浅虫の浦に着くと、宿をとった「出湯の村」の全体像を把握する。煤川の岸には馬あらための「役人の宿」があった。肌赤島に鷗島、弁天をまつる湯の島という自然環境は今も変わっていない。次に、泉源の所在や温泉名の由来を聞き出す。

「温泉は、滝の湯、目の湯、柳の湯、大湯、はだか湯などがたいそうきよらかに湧き、また軒をつらねた家々のうしろにも湯があつてよい。村の中に煮坪といって、ふつふつとにえかかる熱い湯がある。今月の末ごろ、畑の麻を刈って、それを糸釜というもので、どの地方も蒸しているが、この浅虫の浦ばかりは、この煮坪にひたして、わずかの間に蒸してしまう。それで麻蒸という地名がおのずからついたが、ときどき火災の難にあうことから、火に縁のある文字を忌んで、近いころから浅虫と書くようになったと、老村長が語ってくれた」<sup>7)</sup>

浅虫温泉の泉源は、1886（明治19）年に内務省衛生局が調査した『日本鉱泉誌』では8カ所が記載されている。その中には真澄が挙げた5カ所の泉源名もほぼすべて含まれ（「滝の湯」は『鉱泉誌』記載の「大湧の湯」か）、健在であることがうかがえる。

続けて「湯桁（湯坪）の数」はどのくらいかをたずねる真澄に、老村長は「湯ぶねのここほど多いところはない」と答えた。「湯の番人が朝湯をあびていた」という記述からは、浅虫温泉の湯坪を日常管理する番人がいたことがわかる。老村長に付近を案内され、真澄は「夢宅庵という寺に薬師仏をまつって湯の神としていた」ことを記録する。後で詳しく考察するが、「湯の神」を奉る人々の温泉へ

の畏敬の念が表れている。

## (2) 温泉の食への活用

温泉を食に生かした事例も紹介している。現在も温泉豆もやしを観光資源とする青森県大鰐温泉で、当時は大鰐村の枝村・大鰐新田村の湯の川原に広がる大鰐温泉と蔵館村側の蔵館温泉に分かれていた。真澄が紹介した大鰐温泉の食文化への貢献は、温泉豆もやしと湯治中の藩主に献上する「おはつ（御初）田」の二つであった。

「湯の川原に至る。なへ（べ）て大鰐の温泉といへり。此湯の河原の土手とて豆もやしといふものを四時い（煎）だす。軒めぐりに穴蔵のごとく抗を掘り、室として是を作る。さりければ温湯のあたゝかさにて…」(日記『すみかの山』)

「大鰐の湯の河原とて出湯のもとに来る。湯は大湯、山岸の湯、冷の湯、真冷の湯、おがり屋の湯、加賀助の湯、河原の湯とて七ツのゆげた（湯桁）あり。この河原のいでゆのほとりに、苗のいと高うふし立る小田あり。これをおはつ田とて、ことしろ（異代）よりいと早う種まき…」(同前)

大鰐温泉は三代津軽藩主信義が1648（慶安元）年8月に湯治用の御仮屋を建てて、たびたび長逗留して以来、歴代藩主が湯治に訪れたことも発展に寄与した。そのため藩主一行が冬でも野菜やまくわ瓜などの果物を食べられるように「御菜園」を設け、地熱・温泉熱を利用して豆もやしを含めて促成栽培に取り組んでいた。また、早く収穫できる米も献上していた<sup>8)</sup>。1796（寛政8）年、日記『すみかの山』での真澄の記述や図絵はこれを裏付け、温泉食文化上の資料となる。

## (3) 湯治文化の活写

真澄の温泉記述の真骨頂は、湯治文化の様相をこまやかに、土地の人々や湯治客への共感と愛情を込めて描き出している点に発揮されている。旅人の視線と違い、温泉地にも長く逗留し、生活を共にした真澄にこそなしたであろう。

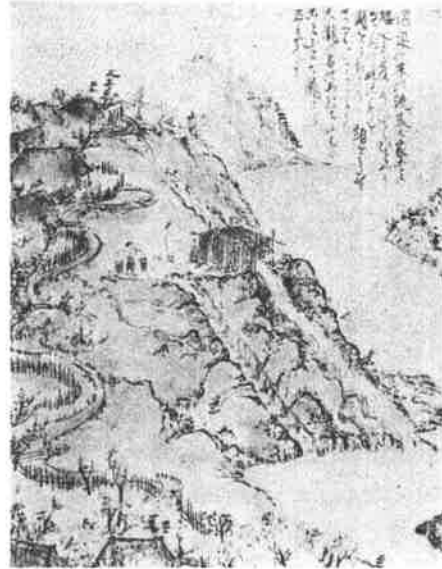


図3 秋田県大滝温泉の滝湯

(注) 1803〔享和3〕年『すすきのいでゆ』。

秋田県大館市の大滝温泉は、真澄が1802（享和2）年12月半ばから「いでゆ浴して年暮れ」、翌年4月21日まで4カ月間一カ所の温泉場に長期滞在した場所。正月もこの温泉で手を洗い、集まって来た人たちと祝い合った。

「湯の末の流れたる滝の下に、やまふど（病人）居並び腰を打たせ、足手を打たせ、頭を打たせて、こも（菰）引き回して岩の上に睦語りし、あるは唄ひ戯て浴みせり」(日記『すすきのいでゆ』)

大滝温泉では、図3のように温泉の末の流れを集めて滝にして、打たせ湯に利用していた。大滝の名もそこからきているという一説も真澄は紹介している。「やまふど（病人）」とは湯治人たち。身体の具合の悪い部分を打たせ湯しながら、睦まじく語り合い、唄をうたったりして過ごす湯治場情景が目に見えようである。

「(四月)十四日、雨のそぼ降るに、稚児を懐に抱へて浴すとて、此のゝ（幼子）はうまずにやあづきにやと、かさ（瘡）の出たるを見驚けり。こと（他の）女のうかがひ見て、あ



づきにや、はやすけにや、もがさにはあらじ  
とて行ぬ。水痘の方言を…（中略）…あづき  
とはこのあたりの辞也」（同前）

真澄と同浴中の、幼子を抱いた母親が腫れ  
ものを見つけて天然痘（もがさ）に罹ったの  
ではないかと心配している。別の女性が「も  
がさではなく、多分あづき・はやすけ（水痘  
＝水疱瘡）でしょう」と心配を和らげる言葉  
をかけて湯から上がって行った。はだかにな  
ってこそ肌の症状に気づく入浴・湯治の場。  
思いやりの気持が伝わってくる。

長逗留する湯治場では、湯治人同士が顔見  
知りになる。まして同宿なら親しさも増す。  
そうしているうち湯治場・温泉地のならい。  
戻る日が来る。そのときどうしていたのか。  
真澄はその情景をも伝えてくれる。  
「湯のやかた（館）に相宿りしたる男女ども、  
やがて浴みの人とらと立ち別れなんはなむ  
け、なごりのうたげ（宴）とて、酒飲み飲み  
酔て、声のかぎりに、『けやくはなれ（清く  
離れ）と お庭の草子（こ）、うら子（こ）  
は枯れても 根子は切れない』けやくは、  
仮借しける心を云ふにや」（同前）

お別れの時が来たけれど、庭の草は枯れて  
も根っ子は切れないように、私たちのご縁も  
切れませんように、と言葉の尻になんでも  
「こ」を付ける秋田弁で別れを惜しむ唄をう  
たい、別れの宴を催す人たち。彼らはまたな  
じみの湯治場で再会するだろう。出会いと別  
れ、再会があるのが温泉場。だからこそ立場  
や秩序、しがらみにとらわれた日常生活の場  
とは異なるコミュニケーション・交流が生ま  
れて互いに癒され、独自の文化が育まれるの  
である。

そうして真澄にも大滝温泉を出立する時が  
来た。1803(享和3)年4月21日昼頃のこと。  
真澄は昨年来のなじみの名残惜しく、訪ね  
合った人たちに歌を一首詠み残した。

「かぎりあれば 立ちいつる湯に 袖ぬれて  
わかるものか 旅のつらけん」  
生涯の旅人であった真澄にも、雪国の一冬

を心身共に温かく一緒に過ごせた温泉場の  
人々との別れ、旅立ちは切ない。それからな  
お26年間秋田にふみとどまる真澄だが、お  
そらくこのときには秋田の地に骨を埋める気  
持になっていたのではないだろうか。湯と人  
と場全体によるもてなしを兼ね備えた温泉場  
が育む温泉文化の真髄にもせまりたい、民俗  
学者の魂がゆさぶられたひとときであろう。

#### （4）泉源地に「湯の神」を奉る

それでは真澄が見つめた、温泉文化の真髄  
とは何であったと考えられるのだろうか。再  
び真澄の大滝温泉滞在中、年が明けた1803  
(享和3)年正月の記述から見よう。

「七日…（中略）…明なばこの湯の神祭るの  
日とて、日待てふ事をして、村長が宿にあり  
とある人とらの集りて、脂火あまた照らして  
銭かいつかね、ドンヅク、タカラビキ、ある  
は六半めける、ばくよう（賭博の様）をぞし  
たりける。こは、のりのをかし（法を犯し）  
ながら、睦月の今日ばかりはとて、むらのを  
さも見許してけりとなん…（中略）…八日、  
ことしかみ（醸）したるとよみき（豊御酒）  
を…湯泉（いでゆ）の神にたい奉りしを持て  
わたり、己らもいたく酔ひしれて押附舞とい  
ふ事をし、あるは、たかうなまひ（筥舞）な  
どの戯をしてけり」（同前）

大滝温泉では正月八日が「湯泉の神」に捧  
げる祭の日であった。七日に前夜祭の「日待  
ち」の行事があり、特別な日のため羽目をは  
ずしても村長は許容している。村人は鉦や太  
鼓を鳴らし、押附舞やたかうな（竹の子）舞  
といった酒宴で舞う土俗的で猥雑な舞を演じ  
たりして、湯泉の神に感謝しつつ楽しい一日  
を過ごした。湯泉の神に捧げる祭は温泉への  
感謝の念と喜びにあふれた祭事であって、一  
般的な宗教的行事とは一線を画す点に留意し  
たい。

同年2月20日、真澄は湯泉の神を奉る所  
を訪れた。

「大滝の湯のもとに来て薬師仏の堂に詣ぬ。  
かたはらの温濤（いでゆ）のとくとくと涌き



写真1 大滝温泉の旧泉源地の薬師神社  
(注) 筆者撮影。



写真2 岩倉温泉の薬師社と旧泉源湯坪  
(注) 筆者撮影。

出るに、板なんし（敷）きて土塊の（載）せて、芒（すすき）を一もと植たる…」

そこは大滝温泉本来の泉源地で、開湯伝説に従い、すすきを植えて奉っていたので、「すすきのいでゆ」と呼ばれてきた。高温で湧き出る泉源地なのにすすきが枯れないのを真澄は「すすきのいでゆ」を描いた図絵に付けた一文で不思議がっている。そこに仏教では「人々の疾病を治癒する、医薬の仏」とされる薬師如来を奉るお堂を設け、鳥居もあった。今もそこには薬師仏を奉るお堂と鳥居が出迎える神仏習合の薬師神社がある（写真1）。

真澄は「湯の神」を奉る温泉地をいくつも

記録している。大滝温泉と同じく今も薬師（神）社があるのが秋田県岩（磐）倉温泉だ（写真2）。

「大石の下よりとくとくと湧きづる也」「湯井いといと浄くして温泉神のみたらしともいふべきものか」（地誌『月の出羽路 仙北郡四』）と1826（文政9）年に記した大岩のある泉源に湯坪をこしらえ、屋根掛けして浴舎を建てていた。その上手に泉源を護る薬師社を奉った情景を図絵に描いている（図4）。

泉源は1914（大正3）年の強首地震で湧出が止まったが、1957（昭和32）年に大岩の下を約200m掘削して自噴する源泉を得



図4 磐（岩）倉温泉の薬師社と泉源湯坪  
(注) 地誌『月の出羽路 仙北郡一 湯本村』。

た。真澄は「湯鹹し、明礬泉やあらむ」と推測したが、新源泉の泉質は含石膏-弱食塩泉なので、推測に近い。旧源泉湯坪は保存され、上手に鳥居のある薬師社が写真2に見える。図絵の世界と基本的に変わっていない。

岩倉温泉の薬師社を真澄は「いでゆのかみのやしろ」と読ませ、図絵に「薬師如来ノ神、温濤（いでゆ）鎮護の護神にして、温泉（ゆせん）名（明）神なり。内には大汝ノ神（オオナムチノミコト）少彦ノ名（スクナビコナノミコト）の二柱を斎ぐ末神の社」と説明文を入れている。

すなわち温泉を護る薬師社の“主神仏”は薬師如来。「従神」として「大汝ノ神」（オオナムチノミコト＝大己貴命＝大国主命）と「少彦ノ名」（スクナビコナノミコト＝少彦名命）の二神を奉るという構図である。ほかの温泉地はどうだったのか。

秋田県雄勝郡の大湯温泉は「浴舎あり、温泉神ませり」（地誌『雪の出羽路 雄勝郡一』）と記すが、何を奉っているかわからない。泥湯温泉は「温湯の神、薬師如来をひめまつる

社」（同前）。川原毛温泉は「湯泉神社 少彦名命にして薬師仏を祭る」（同前）。小安温泉は「湯泉大明神 内陣薬師」（『雪の出羽路 雄勝郡二』）。このように「湯の神」は雄勝郡の温泉場に多いが、真澄が巡った北東北から蝦夷地にかけても奉られていた。それらを表4にまとめた。そして「湯の神」を奉る人々の心性とその構造を以下のように推し量ってみた。

1 冷涼な北東北地方において、温泉が人々の心身や生活にいかうおい、実益をもたらすか。天の恵みである温泉への畏敬の念と慈しみの心がそこから生まれ、温泉の守護を神仏に託して「湯の神」として奉る温泉信仰が醸成された。

2 奉る「湯の神」は、衆生の疾病を治癒する医薬の仏として知られる薬師如来が主で、ほかの神々もときに伴う。奉る場の名称を含めて基本的に神仏習合である。

3 一般に“温泉神”として知られる少彦名命と大己貴命の二神は後発的な存在で、「湯の神」としてはむしろ従属的と考えられる。

表4 菅江真澄が記した「湯の神」を奉る場と対象

道県	温泉地名	奉る場所	奉る対象
秋田県	大滝	薬師神社	薬師如来
〃	岩倉	薬師社	薬師如来＋大己貴命＋少彦名命
〃	川原毛	湯泉神社	薬師如来＋少彦名命
〃	小安	社	薬師如来＋湯泉大明神
〃	泥湯	社	薬師如来＋温湯の神
〃	大湯	浴舎近く	温泉神
〃	杣	薬師堂	薬師如来
〃	湯の岱	温泉神社	薬師如来
岩手県	須川	窟	大日如来
青森県	浅虫	庵・寺	薬師如来
北海道	五厘沢（妻の湯）	薬師祠	薬師如来
〃	白別（ウシジリ）	泉源	「イナヲをたてて湯の神を奉る」

（注）筆者作成。秋田郡山内荘松原村にあった温泉は祠に奉る石仏を湯の神とした。

三番目に関して付言すると、二神は出雲神話の主神である。しかしながら、奈良時代初めに編さんされた完全な姿で残る古風土記の『出雲国風土記』には、「神の湯」とあがめられた玉造温泉や出雲湯村温泉など複数の温泉地が紹介されていても、二神は一切登場しない。後の平安時代に編集の手が加えられた『伊予国風土記』逸文で、道後温泉の由来にかかわって初登場するのである。

日本のこうした“温泉神”のあいまいな性格について筆者は以前に考察を行っている<sup>9)</sup>。真澄が記述したように、神仏習合でかつ複数を奉ることを考えれば、むしろ「湯の神」という表現が喚起する大まかな概念で対象化したほうが、人々の温泉への畏敬と感謝の念を込めた心性をより自然に理解しやすいのではないかと考える。

## 5 結語

温泉とその恵みへの畏敬の念はかつて人々の間にあまねく存在した。その名残は多くの歴史ある温泉地の温泉寺、薬師堂、温泉神社、あるいは典型的には大分県の共同湯に奉る薬師様や地藏尊に詣ってから入浴する土地の人の姿に見いだされる。今日、温泉へのこうした心情、広く「温泉信仰」と呼ばれるものに関心を持つことや、真澄が体験した湯の神へ捧げる祭、湯かけ祭といった温泉地の神事・祭事も少なくなった。まさにその点でも、真澄の著作は温泉文化を見直す大切な歴史資料である。

また、温泉地の成り立ちをみても、薬師(神)社、湯泉神社を含む温泉神社、薬師堂、温泉寺等が泉源と湯坪を護る位置に建つ姿は温泉地の原型、基本形と言える。温泉地の成立構造も温泉文化・信仰にかかわっている。真澄は北東北地方の当時のシンプルな温泉場のありようを描写して、そうした温泉地の基本構造を浮き彫りにしたのであった。

なお、本稿では「温泉信仰」という言葉を、

一般的な宗教的概念とは区別して、先に述べたように「温泉(存在とその恵み)への畏敬と感謝の念を込めた人々の心性」という意味合いでとらえている。それはまさしく真澄が出会い、見つめた泉源に「湯の神」を奉る温泉地の人々の心情に共感して分け入る世界にほかならない。

そうした認識において温泉文化の基底には「温泉信仰」があったと考えられる。北東北地方を中心とした温泉(地)への菅江真澄の言及、記述から、そのことが鮮やかに読みとれると考える。

## 注・参考文献

- 1) 一例として、北東北学検討委員会による「北東北学構築基礎調査事業報告書-北東北学の構築をめざして-」(2004年3月)には「『菅江真澄遊覧記』に見る江戸時代の北東北」という一節を設けているが、北東北における基層文化の共通性の中に遊び、風俗、歌謡・芸能等はあっても湯治や温泉(文化)への言及はまったくなされていない。また、北東北の民間信仰、神社に言及した中にも温泉信仰、温泉神社は挙げられていない。
- 2) 田口昌樹(2000)『『菅江真澄』読本4』、無明舎出版、90~119頁。
- 3) 鈴木一夫(2010)『江戸の温泉三昧』、岩田書院、62~73頁。
- 4) 佐藤久治(1983)『菅江真澄の謎多き生涯』、秋田真宗研究会。
- 5) 1738(元文3)年刊の香川修徳『一本堂薬選続編 温泉』は、恐山温泉を「山ノ湯 又花染ノ湯ト称ス、浴後肌膚紅色ヲ染成ス」と記している。
- 6) 八隈蘆庵(1810)『旅行用心集』(復刻版)、八坂書房刊、99頁。同書の「温泉地名」にはたとえば岩手県台温泉のほか台村の5つの泉源名も独立させて挙げている。これらは台温泉1カ所にまとめた。
- 7) 内田武志・宮本常一編訳『菅江真澄遊覧記 2』、平凡社東洋文庫、109~110頁。

- 8) 大鱈町史編さん委員会編 (1991) 『大鱈町史』  
中巻、357～372頁。
- 9) 石川理夫 (2001) 『温泉で、なぜ人は気持ちよくなるのか』、講談社プラスアルファ新書、  
38～44頁。

## 動物の発見伝説に係る温泉の泉質

— 既存文献と河野調査データの解析を通しての考察 —

## The Chemical Characteristics of Hot Spring Waters Discovered Traditionally by Wild Animals — Considerations of Previous Research and Data Represented by Kono —

甘露寺 泰 雄\*

Yasuo KANROJI

キーワード：動物 (wild animals) ・ 発見伝説 (discovery legend) ・ 温泉の泉質 (chemical characteristics of hot spring waters)

## 1 はじめに

温泉の発見に動物が関与していた事例は、洋の東西を問わず数多く知られている。わが国では、動物の名前が付いた温泉名、例えば、鹿の湯、熊の湯、鶴の湯、鷺の湯、鳩の湯、などがそれで、全国的にかなりの数にのぼっている。著者は、「温泉」(2007)に、表記の題で一文<sup>1)</sup>を寄せた。その際の資料として、西川義方「温泉須知」<sup>2)</sup>(1937)、伊東祐一「温泉の科学」<sup>3)</sup>(1942)に引用された55カ所の温泉を利用した。最近、河野忠が大分県温泉調査研究会報告の第58号<sup>4)</sup>に、「温泉発見・開湯伝説から見た泉質と効能に関する予察的考察」と題して、動物の発見した温泉として、100数カ所の温泉地と動物の種類などを紹介している(このうち30カ所は、西川、伊東の文献の温泉地名と重複し、西川、伊東の文献記載のうち25カ所は河野の温泉地名には含まれていない)。そこで、河野のあげた温泉名、動物の種類、及び泉質名を整理して動物別に一覧表としてまとめた(表1)。

泉質名は、なるべく古い時代の記載が好ましいので、内務省の調査報告<sup>5), 6)</sup>、野口冬人の全国温泉大事典<sup>7)</sup>、温泉必携<sup>8)</sup>(1957)な

どから引用し、泉質は旧泉質名を用いた。ただし、泉質名は副成分によって多岐に分類されるので、煩雑を避ける意味で、表1では泉質を6種類に簡略化し、A:塩類泉、B:単純温泉、C:硫黄泉(含硫黄〇〇泉を含む)、D:放射能泉、E:炭酸泉、S:その他とした。このように分類したのは、鉱泉分析法指針(改訂)で、泉質が大きく単純温泉、塩類泉、及び特殊成分を含む温泉の3種類に大別され、特殊成分については水素イオン、硫黄(硫化水素、チオ硫酸)、鉄、二酸化炭素、ラドンなどの含量により泉質が細分されていることから、この方法に準拠したためである。

筆者が前報で述べた論旨は、動物の発見伝説にまつわる温泉の泉質名は、単純温泉が少ないこと、ある程度の成分を含む温泉は、原生動物や藻類、細菌類などが生息し、それを求めて温泉の湧出口や温泉水が流出した沢、河川中などに魚類、鳥類、昆虫類や野生動物が集まり、特に伝説が発生した時代の温泉は全くの自然湧出であり、二酸化炭素や硫化水素などが含まれ、昆虫類が集まってくる環境を提供していることは十分あり得ることである。つまり、動物の生活習性の中で最

\*中央温泉研究所(Hot Spring Research Center)

表1 動物の種類別温泉地名・泉質略記・泉温一覧表

種類	温泉地名	泉質略記	泉温	種類	温泉地名	泉質略記	泉温	種類	温泉地名	泉質略記	泉温			
鶴 温泉地 17カ所 泉質種 3	温湯	A	45	鹿 温泉地 16カ所 泉質種 5	鹿部	A	75~103	熊 温泉地 3カ所 泉質種 2	湯沢	B	37.5~50			
	鶴ノ湯	B	—		浅虫	A	41~92		野沢	C	61.5~72			
	大滝	A	60		酸ヶ湯	S,C	48~60		熊の湯	C	48~77			
	温海	C	82		峨々	A	63	猪 温泉地 3カ所 泉質種 1	大鱒	A	54~81.5			
	鶴脛	A	66		鹿の湯	—	—		猪戸	A	—			
	上の山	A	56~68		鹿の湯	—	—		伊東	A	—			
	湯本	C	60		那須元湯	C	70~76	狸 温泉地 2カ所 泉質種 1	湯河原	A	59~79			
	萱手	—	—		鹿沢	A	47		温泉津	A	50			
	早戸	A	44~77		鹿井之湯	—	—		馬 温泉地 2カ所 泉質種 2	駒の湯	C	40		
	沢渡	C	41~49		鹿沢	A	—	母畑		D	36~37			
	鶴ノ湯	—	—		鹿教湯	A	40~52	狐 温泉地 2カ所 泉質種 2		神の湯 湯田	D B	— 68		
	鶴ノ湯	A	—		湯ノ山	D	29		その他				牛(A),犬(A),猫(D), 鷺(A),鳶(A),雁(A), 烏(不明),鶏(C),亀(A), 蛙(C),タコ(A),蟹(E), 動物(種類不明)(C)	
	城崎	A	48~58		鹿ノ湯	C	—							
鶴湯	A	11	湯谷	—	—									
原鶴	B	41.2~45.1	山鹿	B	42	下呂	B, C	52	鷹 温泉地 12カ所 泉質種 3	作並	A	57~66		
嬉野	A	78~95	壁湯	B	31~41	椿	C	33.5		鷹の湯	A	90		
湯の鶴	B	41~54	鷺ノ湯	A	40	鷺ノ湯	A	—		湯田川	A	40~45		
猿 温泉地 11カ所 泉質種 5	猿倉	C	73	湯郷	A	37.6	湯来	D		28~35	白布高湯	A	63	
	鈴	C	51	湯道	B	45.4~46.8	武雄	B		45.6~48.3	白布	C	—	
	湯ノ澤	A	26	下田	B	—	六ヶ迫	E		16	宝川	B	58~60	
	猿ヶ京	A	58.9	鳩の湯	A	—	鳩の湯	A		40	鷹ノ湯	A	55.5	
	山田	A	45.7~47	鳩の湯	—	—	大牧	A		43.5	松ノ山	A	60~63	
	崖ノ湯	S	42~50	温泉地 6カ所 泉質種 2	鳩の湯	—	—	中宮		E	60	高瀬ノ湯	A	73
	三朝	B,A,D	47~74	温泉地 4カ所 泉質種 2	鳩の湯	—	—	鳩ヶ湯		E	17	和倉	A	82
俵山	B	48	蛇 温泉地 4カ所 泉質種 2	中山平	C	35.6~100	鷺 温泉地 3カ所 泉質種 2	鷺宿		C	—	湯湧	A	45.3
寒ノ地獄	B	—	老神	B	—	鷺夏油		A		52~59	湯村	A	32~40.6	
湯平	A	59~84	湯後	B	45.4~46.8	湯原	B	45~50						
平湯	A	—	武雄	B	45.6~48.3									

(注) A:塩類泉  
 B:単純温泉  
 C:含硫黄泉  
 D:放射能泉  
 E:炭酸泉  
 S:その他  
 河野忠の資料により筆者作成。

も直接的な餌—餌場—と温泉が絡んでいるという要素を見逃せないと考えられる。もちろん、発見伝説は傷ついた動物が温泉で傷を癒していた事実を人間が知った事によるが、動物が温泉の効果を知っていたかどうかは明らかではない。そこで、動物の発見伝説に係る文献を幾つか収集要約し、河野の報告した100数ヵ所の温泉地について、泉質の数、特に全資料数に対する泉質の割合と明治時代以降のわが国の温泉統計との比較、動物の種類と泉質などの関係を中心に検討し、考察した。

## 2 研究の目的と方法

動物と温泉に関する文献について、1950年代以降の日本温泉協会発行の雑誌「温泉」に掲載されている論文を調べた。鳥類研究家の鷹司信輔<sup>9)</sup>は、鶴、鷹、鹿などが水浴みをしている場所で湯が湧いていたと言う話はわが国には沢山あり、鳥類は水の湧出している場所に集う習慣があり、東京都式根島の海岸温泉や北海道恵山岬の燈台下の湧泉ではタコが餌を求めて集まる、伊東温泉の海岸の川中の湧泉に魚が集まる、さらに伊東市玖須美の浄の池の大鰻などの事例などを紹介した。平野威馬雄<sup>10)</sup>は、長野県海ノ口、鹿の湯の埋沢で、硫黄の臭いのする温泉に子鹿が傷を癒している話を村人の話として紹介し、古賀忠通<sup>11)</sup>は、渡り鳥の越冬で鶴などが餌を求めて南下する際、雪で埋もれた川や沢などの雪どけ水場集まる事例を紹介している。魚博士の末広恭雄<sup>12)</sup>は、熱帯魚や温度と魚の密接な関係について、海底から湧き出る温泉に病的な魚が集まる話は決していい加減な話ではないとし、浄の池の魚についても言及している。

上野動物園長であった石内展行<sup>13)</sup>は、動物の湯浴び、水浴び、泥浴びを紹介し、温泉に浸かるのは特殊な例で、普通は水浴を楽しむと言う。スイギュウ、ゾウ、カバ、サイなどは水浴が大変好きで、清潔よりも寄生虫や害虫から身を守る習性があり、ゾウは水場か

ら水場へと移動し、カバは日中はほとんど水中におり、日が落ちると陸上で草を食べると述べている。石内は猿、鹿の湯浴びは特殊な例であると言い、これについて石川一雄<sup>14)</sup>は長野県の地獄谷では人間とサルは混浴出来る事例を述べ、千葉康由<sup>15)</sup>は猿の入浴シーンの写真を出版している。こうして、雑誌「温泉」<sup>16)</sup>では温泉の発見伝説について「誌上温泉展—温泉の発見伝説—」の特集を組み、イラスト入りで解説した。

動物の自然健康法については、シンディ・エンジェル (Cyndy Engel) の『動物たちの自然健康法—野生の知恵に学ぶ (Wild Health)』の邦訳<sup>17)</sup>があり、動物が天然の薬、つまり薬草、鉱物、泥、湧き水などを使って病気やけがを治療する事例や観察記録が数多く紹介されている。温泉の事例は余り紹介されていないが、最近出版されたW. B. マイヤーロホ (江口英輔訳) の『動物の奇行には理由がある』<sup>18)</sup>の中で、温泉好きの動物を紹介している。西川義方<sup>3)</sup>は、羊が一定の場所で水を飲むのを羊飼いが見て水質検査を行い、温泉水であることが判明したドイツのメルгентハイム温泉やボヘミア王カール四世が鹿狩りの際に小川に飛び込んだ獵犬を見て発見の端緒になったカルルスバード温泉の事例などを紹介している。また、William A.R. と Thomson M.D<sup>19)</sup>は、人間が動物の行動から学んだ英国バース温泉の事例を記載している。種村季弘、巖谷国士、川本三郎<sup>20)</sup>は、温泉についての討論をし、種村は「動物と人間は同時に温泉を発見した。人間も動物である。」、川本は「脱肛に悩める猫の患部を温泉に浸して治療したのが猫啼温泉の始まりである。」と言い、動物が温泉で治療することは充分あり得るとしている。

疾病や傷の治療だけでなく、温泉水は各種の成分を含んでいるので生物にとって栄養の補給という意味で利用価値が予想される。この例として、谷畑藤男<sup>21)</sup>はアオバトが神奈川県大磯町照ヶ崎海岸で海水を飲んでいると



ころを観察したと言う。『群馬県温泉誌』<sup>22)</sup>には、アオバトが上野村野栗沢温泉の源泉に定期的集まり、恐らく温泉を飲んでいるのではないかとの記述がある。野栗沢温泉はナトリウム-塩化物冷鉱泉で、塩分含量は4.07～4.87g/kgであるので、塩分補給として温泉が利用されていても不思議はない。長島ら<sup>23)</sup>は野栗沢のアオバトについて栄養補給としての塩分摂取を報告し、前記した『動物たちの自然健康法』にも栄養補給としての植物、鉱物や泥などの利用が多く紹介され、こまたん著『アオバトのふしぎ』<sup>24)</sup>にもアメリカに鉱泉を呑むハトの紹介がある。

以上のように、文献からは動物が自然療法や自然治療を行い、健康保持に努めていることは確かのようにであるが、温泉治療については昔の記録や観察であって、自然科学的な検証が行われておらず、科学的なエビデンスという面では根拠が薄弱ではなかろうか。筆者が既存文献で調べた範囲では、泉質との関係に言及している報告は見当たらなかった。

### 3 考察

#### (1) 泉質総計

まず、表1の河野の泉質について検討した結果を述べる。泉質について略記で表1を整理すると、表2のようになる。同じ温泉でもいくつかの泉質が記載されていること、不明の泉質もあるが、泉質総数108のうち最も多い泉質は塩類泉で51、次いで含硫黄泉19、単純温泉18と続く。以下、放射能泉6、炭酸泉4、その他2、不明8である。総数に対する割合では、塩類泉が47%、含硫黄泉18%、単純温泉17%などの順である。

次に、この結果とわが国の温泉についての泉質統計と比較してみる必要があると考え、1915年の石津<sup>25)</sup>、1935年の内務省<sup>5)</sup>、1951年の服部<sup>26)</sup>、1954年の厚生省<sup>8)</sup>、新しい試料として1989年の斎藤の統計<sup>27)</sup>を泉質の略記でまとめ、表3に示した。

総数の比較は、対象温泉地の数が異なるので、比率を比較してみると、Aの塩類泉は36～52%、Bの単純温泉は23～40%、Cの含硫黄泉は8～13%、Dの放射能泉は1

表2 動物が発見した温泉の泉質

泉質分類	塩類泉	単純温泉	含硫黄泉	放射能泉	炭酸泉	その他	不明	総計
略記	A	B	C	D	E	S		
泉質総数	51	18	19	6	4	2	8	108
泉質割合%	47	17	18	5	4	2	7	100

(注) 河野忠の資料により筆者作成。泉質の総数：108 温泉地総数：104

表3 わが国の温泉の泉質

資料		塩類泉	単純温泉	含硫黄泉	放射能泉	炭酸泉	その他	計
略記		A	B	C	D	E	S	
1915年 <sup>25)</sup>	総数	437	398	158	—	23	190	1,206
	%	36	33	13	—	2	16	100
1935年 <sup>5)</sup>	総数	443	205	68	14	10	127	867
	%	51	24	8	1	1	15	100
1951年 <sup>26)</sup>	総数	675	340	136	12	17	166	1,346
	%	51	25	10	1	1	12	100
1954年 <sup>8)</sup>	総数	1,985	876	504	139	88	215	3,807
	%	52	23	13	4	2	6	100
1989年 <sup>27)</sup>	総数	8,547	8,136	2,218	671	41	562	20,175
	%	42	40	11	3	0.2	3	100

(注) 河野忠の資料により筆者作成。各年次の番号は出典に対応。

～4%、Eの炭酸泉は0.2～2%、その他は3～16%となった。ここに、わが国の温泉の泉質は、統計資料が現れて以降（おそらく1911年以降）塩類泉が最も多く、単純温泉がこれに次ぎ、含硫黄泉、放射能泉、炭酸泉と続く点は約100年の間あまり変わっていない。特に注目すべきは、動物発見伝説の時代は全て自然湧出の状態であり、泉質を比較するのに1915年の石津の統計<sup>25)</sup>が適していると思われる。表2と比較すると、動物の発見伝説に係る温泉の泉質は、塩類泉、含硫黄泉、炭酸泉が多く、単純温泉がかなり少ない。

以上は泉質の比率の比較であるが、自然湧出時代の温泉はCO<sub>2</sub>やH<sub>2</sub>Sのガス成分が含まれ、特にCO<sub>2</sub>は1000 mg/kg以下の場合には炭酸泉とは言わない。したがって、泉質だけで判定出来ない場合もあるのではないかと考え、明治時代の温泉分析表として1912年発行の衛生試験彙報<sup>6)</sup>、鉱泉分析表掲載の491試料からCO<sub>2</sub>含量が記載されている204試料について、含量と試料数の統計及び比率を計算した。ただし、この試料は明治時代の全国各地から依頼された試料の分析値であり、当時の温泉水の化学的性質の平均的な性格を示しているわけではない。CO<sub>2</sub>含量は、温泉法が250mg、炭酸泉が1000mg/kg以上であるので含量範囲は、250mg未満、250～1000mg、1000mg以上の3段階とした。その結果を表4に示したが、これから大変重要な結果が得られた。それは、明治時代の自然湧出状態での温泉水中のCO<sub>2</sub>含量はかなり高いという事実である。表4から、CO<sub>2</sub>含量が250mg/L以上の温泉は、204試料の66%を、

表掲載試料数491に対して27%となる。つまり、炭酸泉という泉質は1,000mg以上の温泉しか計測されないので、全体に対する%は低い。CO<sub>2</sub>含量でみれば、往時の温泉は含量が高いといことが推定され、これは、泉質統計だけでは見逃されやすい温泉の姿を物語っていると考える。特にこの分析表は、地域住民が異常な成分を含むのではないかと試験機関に分析を依頼したと考えられ、野生動物も本能的にこれら成分を含む湧水の異常性を察知していたのではなかろうか。なお、H<sub>2</sub>Sについては、鉱泉分析表には含量の記載が少ないので、硫化水素臭の記載のある温泉をピックアップすると、491試料中54試料、13%が得られた。これは、表3に示した含硫黄泉が8～13%とあまり変わっていない。自然湧出時代の温泉は火山性の温泉が多く、現在のような非火山性の温泉が少なかったことが関係しているかもしれない。

以上述べたことから、筆者は、動物の発見伝説が生まれた時代は、自然湧出の塩類泉が最も多く、ついで、硫黄泉、さらにはCO<sub>2</sub>を含む温泉も多く、一般的に何らかの成分を含んでいたと推定され、それが単純温泉の少ないこととも結びつき、動物の発見伝説に絡む温泉の特性を構成しているのではないかと、そして、この特性から前報で述べたような動物の餌場を考えた。

餌場を考える場合、温泉に生息する生物が問題となるので、これを検討した。江本義数<sup>28)</sup>は、温泉生物に関する総説の中で、温泉生物の最も多く出現する泉質、pH、泉温について報告している。温泉生物が多く出現

表4 明治年間の湧水・鉱泉・温泉のCO<sub>2</sub>含量

CO <sub>2</sub> 含量の範囲 (mg/L)	平均値 (g/L)	試料数	割合 (%)
34 ～ 220	0.083	70	34
250 ～ 1000	0.612	57	28
1000 ～ 3850	1.56	77	38
計	0.79	204	100

(注) 1911 (明治44) 年、衛生試験彙報第112号、日本鉱泉分析表<sup>6)</sup>による。  
CO<sub>2</sub>含量が記載されている204試料についての集計。

する温泉は、それだけ生物にとって好ましい環境を提供していると考えられ、その結果、温泉生物の最も多く出現する泉質は、食塩泉、つまり塩類泉で、次いで単純温泉である。温泉生物の中で、温泉植物（主として藻類）は食塩泉が最も多いが、温泉動物（主として原生動物と軟体動物、節足動物）は単純温泉が最も多い事を述べている。これは全国的に食塩泉と単純温泉が多い事と関係があると思われるが、それ以外に単純温泉は含まれる塩分だけでなく、前述したように泉質には表示されない成分、つまりCO<sub>2</sub>やH<sub>2</sub>Sの含量が重要であると考えた。たとえば、pHをみると、江本の表ではpHが6～7程度の微弱酸性～中性の泉が、生物が最も多く出現するpHとなっていることが大変重要ではなからうか。

CO<sub>2</sub>やH<sub>2</sub>Sは昆虫と関係がありそうで、たとえば蚊はCO<sub>2</sub>が好きで集まって来ると言う事実<sup>29)</sup>である。H<sub>2</sub>Sについても、噴気地帯や硫黄泉の周辺には昆虫類がよく集まっている。松尾芭蕉の有名な「奥の細道」の殺生石・遊行柳（現在の栃木県那須湯本温泉）の項<sup>30)</sup>に、「殺生石は温泉の出る山陰にあり、石の毒気いまだほろびず、蜂・蝶のたぐい、真砂の色の見えぬほどかさなり死す」とあり、筆者も1950年代後半にこの周辺の沢にあるいくつかの噴気孔でも同じように昆虫類の死骸が重なっているのを見ている。これは、恐らく噴気にH<sub>2</sub>SだけでなくCO<sub>2</sub>が多い事が関係していると思われる。兵庫県の有馬温泉では、昔は愛宕山の南側の低地一体は地獄谷と呼ばれ、そこの幾つかの穴から炭酸ガスが発生し、虫や小鳥が倒れていたと言う<sup>31)</sup>。これは恐らく酸欠も関係していると思われるが、かなり古くからの文献に記載されていると言う。一般的に酸性泉や硫黄泉はH<sub>2</sub>Sだけでなく、CO<sub>2</sub>含量が多い事が判明している。

これらの結果から、温泉水や噴気のガスにさそわれて昆虫類が集まり、それを餌として魚類、鳥類、他の野生動物が集まることで、温泉水や湧泉が餌場を提供しているのではな

からうか。したがって、動物の発見伝説に係る温泉の泉質は単純温泉が少なく、塩分や特殊成分を含む温泉が多くなるというのが筆者の論拠である。一言で言えば、動物の生活と慣習が動物の発見伝説に係る温泉の泉質に関係しているという結論である。

この考え方に対して、反論も存在する。それは、動物の発見伝説に係る温泉に塩類泉が多いのは、元々わが国の温泉は塩類泉が多いのであって、動物が塩分を摂取したりしているわけでもなく、江本の試料では、昆虫類の発生頻度として単純温泉が多いことと同じように、本来の温泉を人間も動物も昔から利用していたと言う種村<sup>20)</sup>らの見解の方が自然ではないかという意見である。先に述べたように、わが国の温泉の泉質そのものは、塩類泉が最も多く、単純温泉がこれに次いでいるという特性は昔も今も大きくは変わらないことから、餌場だけが動物の集合の根拠になり得るかどうかが疑問であるとの意見もあり得る。これについては、筆者は現状では否定出来るほどの根拠はないが、表3や表4の結果から、動物の発見伝説に係る温泉では単純温泉が少なく、含硫黄泉が多いことに対して何らかの理由付けが出来ないかという意味で、私見を披露したのである。

最後に温度についてであるが、先の江本の報告では、生物が最も多く出現する範囲は31～40℃、つまり高温ではない点である。もちろん、高温の温泉に動物は入浴するとは考えられないので、高温泉が河川水や地下水で希釈され、微温に成った状態で動物類が利用すると考えられる。なお、江本の資料によると、温泉生物の出現頻度は40℃以下が圧倒的に多いことも、今述べたことと矛盾しないようである。

## (2) 動物の種類と泉質

次に動物の種類について解析してみる。表1の結果を動物の種類別に温泉地名、泉質略記、泉温などを主な動物種と泉質について整理すると、表5のようになる。

表5 動物の種類・泉質別温泉地総数と泉質数

主な動物	塩類泉	単純温泉	含硫黄泉	放射能泉	炭酸泉	その他	不明	総数*	泉質
	A	B	C	D	E	S	—		
鶴	9	3	3				2	17	3
鷹	10	1	1					12	3
鷺	3	4	2	1	1			11	5
鳩	4				1		1	6	2
鶯	2		1					3	2
鹿	6	2	3	1		1	4	17	5
猿	6	3	2	1		1		13	5
熊	1		2					3	2
猪	3							3	1
狸	2							2	1
馬			1	1				2	2
狐		1		1				2	2
蛇		2	2					4	2
計	46	16	17	5	2	2	7	95	35

(注) その他の動物 13 種の内訳 (\*泉質総数 108) 牛(塩類泉 1)、犬(塩類泉 1)、猫(放射能泉 1)、鷺(塩類泉 1)、鳶(塩類泉 1)、雁(塩類泉 1)、鳥(泉質不明 1)、鶏(含硫黄泉 1)、動物(含硫黄泉)、亀(塩類泉 1)、蛙(含硫黄泉 1)、タコ(塩類泉 1)、蟹(炭酸泉 1)

動物で一番多いのは鶴と鹿で、17温泉地、泉質は鶴が3種、鹿が5種である。次いで猿の13温泉地、泉質5種、鷹の12温泉地、泉質3種、鷺の10温泉地、泉質5種、鳩の6温泉地、泉質2種である。その他の動物は多種にわたり、鶯、熊、猪、狸、馬、狐、蛇、牛、犬、猫、鷺、鳶、雁、鳥、鶏、亀、蛙、タコ、蟹、種類不明の動物などである。

鳥類が多いのは、越冬と餌を求めて移動する習性があること、視力が優れ、高所から地上生物の動きがよく分かることに関係していると思われる。また、昔は狩猟が盛んで獲物を求めて山野を駆けめぐる間に、動物との接触が動物の発見伝説に繋がっているのではなからうか。また、人間の生活に関係する動物が多いのも特徴である。

塩類泉が多い点については、本来塩類泉が温泉の過半数を占めている事他に、塩分が栄養補給源として寄与している事も充分考えられる。特に前述したアオバトは塩分補給と見て差し支えないのではなからうか。地域的

には、鷹は東～東北日本、鷺は中部以南・以西と明瞭な地域差がみられる。これがどのような意味を持っているのかは明らかではない。

元来、野生動物は、泉温の高い温泉は近づかないと言われており、入浴する習慣もないようである。全国的に鶴の湯、鹿の湯、鷹の湯、鷺の湯などと言った名称の温泉が多いが、動物が温泉で湯治する能力をもっているかどうかは明確にはわかっていない。たとえば、今まで引用した多くの文献でも、動物が湯治するかどうかについては余りはっきりしたことを述べていない。要するに、昆虫が集まれば、それを餌として蛙、蛇、魚などが集まり、他の小動物や鳥類も集まるのではなからうか。

最後に、動物は本当に湯治するかという問題は、今まで述べてきたように科学的なエビデンスは大変乏しい。しかし、筆者の経験として1955年5月、群馬県四万日向見温泉で朝方アオダイショウが36℃前後の野天風呂

に浸かっているのを見たことがある。地元の方の話では、よく見かける光景で、恐らく体調の悪い蛇なのではないかと言う。蛇については、温泉の掘削地点調査で各地を踏査しているときに、蛇の群がっている地点は温水が湧出しているという話を聞いた。筆者の経験では、群馬県の法師や四万温泉周辺、栃木県那須岳の山麓、宮城県鎌先や三重県湯の山温泉周辺では蛇が多かった記憶がある。長野県地獄谷の猿は有名で、何回も現場を見たことがあるが、大変気持ちよさそうに入浴していた。これについては、前述したように写真<sup>15)</sup>が出版されている。福島県いわき市の馬の温泉療養施設は有名で、これは競走馬専門の治療施設である。このプールで馬が気持ちよさそうに入浴していた光景を何度も観察した。また、鳥の水浴びや動物の水浴、泥浴は前述したように皮膚の寄生虫や虫よけであると言う。人間でも傷の湯とって、昔から、微温、弱アルカリ性の食塩泉、重曹泉、石膏泉、放射能泉などがそれであるとされ、傷口ほど成分が体内に浸入し肉芽組織の改善がもたらされるとされている。

### (3) 動物による温泉発見の具体像

ここでは、幾つかの文献に記載されている温泉発見の伝説を温泉地別に按察してみる。温泉名の次の括弧内は県名、泉質とその記号を記入している。

①加藤玄知、宮坂光次による発見伝説『温泉大鑑』(1935)<sup>32)</sup>

- a) 鹿教湯 (長野、硫酸塩泉) : 猟師が獲物を求めて山深く分け入ったところ、芝生に一頭の鹿が寝ころんでいた。近寄ると拝むような仕草をするので、よく見ると脚に疵を負っていた。その傍らに湯気の立った温泉が湧いており、鹿は疵口をこれに浸していた。
- b) 伊東猪戸の湯 (静岡、食塩泉) : 芦の茂る荒地で湯が湧いており、そこへ時々手負いの野猪が来て入浴する。よく見ると疵が癒されていたので、地元の人が切り傷に効

くと知って人々に伝えたのが猪戸温泉の始まりで、その後伊東温泉が開けた。

- c) 熊の湯 (北海道) : 函館から7里ほど山奥で、熊によって発見された。アイヌの集落に一人の美丈夫が居り、猟に出かけて山奥に入ったところ、谷間の1ヵ所に雪の積もらない場所があり湯気が立ち上っていた。そこに一頭の大熊が湯に浸っており、付近には鷹や鷲もおり、野獣の歓楽郷であった。猟師が熊を狙って射たところ傍らの鷹に命中した。突然熊が猟師に襲いかかり鋭い爪に引き裂かれその場に倒れた。帰りを待ちわびていた猟師の恋人が探しにでかけ、湯の湧くところで鮮血にまみれて倒れていた彼を見つけ、水を口中に含ませると息を吹き返し、湯のおかげで疵も癒えて里に帰ることができた。
- d) 平湯 (岐阜、重曹泉) : 甲斐の武田勢がこの地に侵入したとき続出する傷病者が、年老いた白猿が山間の湧泉に浴していたのを見て入浴を試み、効き目が現れた。
- e) 湯田川田の湯 (山形、硫酸塩泉) : 昔、眼病を病んでいた牛が角で地面を突いたところ湯が出て、眼病が癒えた。
- f) 湯田川正面の湯 (山形、硫酸塩泉) 一羽の白鷺が湯を浴び、疵を癒した。
- g) 武雄温泉 (佐賀、重曹泉) : 谷間にいる白鷺を追いかけて谷川に入ったところ、暖かいので川をさかのぼると岩間から温泉が湧いており、鷺の森と呼ぶようになった。
- h) 別府登美湯 (大分) 傷ついた鳶が舞い下り、湯の中に脚をつけ癒し、再び飛び去った。
- i) 船小屋 (福岡、炭酸泉) 松永川の両岸に湯が湧いており、雀が湯気で死ぬので雀地獄と呼んでいた。疝癩を病んだ老人が地獄に浴して回復し、霊泉として有名になった。
- j) 峨々 (宮城、弱食塩泉) : 手負い鹿の浴しているところから発見された。
- k) 下呂 (岐阜、単純温泉、単純硫黄泉) : 鶴が疵を癒しており、温泉が発見された。
- l) 名栗鉱泉 (埼玉) 足に疵を負った馬を馬子

が水で洗って治癒した。

②『群馬の温泉』(1980)<sup>33)</sup>

- a) 宝川 (群馬、単純温泉) : 白鷹が一羽谷間から舞い上がった所に湯煙が立ち登っていた。
- b) 鳩の湯 (群馬、硫酸塩泉) : 三羽の鳩が谷間より湧出する湯に浴し、疵を癒した。
- c) 霧積 (群馬、硫酸塩泉) : 猟師が犬を連れて鹿狩りをしていたが、犬が見えなくなり、それを追って川上へ行くと岩陰に潜んでおり、温い湯に足を浸けていた。
- d) 塩ノ沢 (群馬、食塩泉) : アオバトが塩水を求めて集まっていた。
- e) 尻焼 (群馬、硫酸塩泉) : 湯が湧く周辺に夥しい蛇が集まっていた。
- f) 鹿沢 (群馬、アルカリ泉) : 鹿が疵を湯で癒していた。

③『道後温泉』(1982) (愛媛、単純温泉)<sup>34)</sup>  
脛に疵を負って苦しんでいた一羽の白鷺が岩間から湧く湯を見つけて毎日来て足をつけ、暫くして疵が癒え元気に飛び立った。

④『山形県温泉誌』(1973)<sup>35)</sup>

a) 上山 (山形、食塩泉) : 足を痛めた一羽の鶴が沼の水辺に足を浸し、7日目に元気に飛び立った。月秀上人が湯が湧いているのを知り、沼の水を干して温泉を湧き出させた。

⑤『別府温泉史』<sup>36)</sup>

- a) 鳥の湯 (大分) : 鶴見地獄のわきを別府八湯の掘田温泉に登る旧道に沿って点々と噴煙が立ち昇っており、鳥地獄と呼ばれ、鳥が集合していたと言う。
- b) 鶴の湯 (大分、酸性塩類泉) : 足を痛めた一羽の鶴が飛んできて、森の中の水で疵を癒して飛び去った。薪取りの老夫が鶴の下りた場所を探し、湯が湧いているのを知った。
- c) 鳶の湯 (大分、酸性塩類泉) : 一羽の鳶が毎日のように空高く飛び上がっては舞い降りていたのを百姓がみて、其の場所に泡が立った湯が湧いていた。

⑥その他

a) 俵山温泉<sup>37)</sup> (山口、単純温泉) : 正川河畔の共同浴場の出口から流れる温泉水に、錦鯉が重なり合って湯の出口に頭を向けじっと動かないという記事 (山形県温泉協会、温泉やまがた、第167号) があり、植田理彦の談として掲載されている。

## 4 むすび

この報告は、動物が発見した温泉伝説について、(1) 動物と温泉との関係についての既存文献、(2) 泉質や化学成分の特性についての解析と考察、(3) 動物が発見した温泉の経緯の紹介について述べ、筆者なりの見解をとりまとめたものである。特に(2)については、動物が発見した温泉伝説について、河野忠の報告に掲載された温泉地名と動物の一覧表に、主として戦前の文献から泉質及び泉温を付してみたところ、動物が発見した温泉は塩類泉が最も多く、これに次いで含硫黄泉、単純温泉が続いており、特に泉質の比率について新知見が得られた。なお、泉質は多岐にわたるので、簡略化のために、A:塩類泉、B:単純温泉、C:含硫黄泉、D:放射能泉、E:炭酸泉、F:その他、の6種に大別して議論を展開した。その結果は以下のようである。

① 動物が端緒になって温泉が発見された伝説は、既存文献でも事例が多く、また、野草、鉱物、泥、湧水などを利用した動物の自然療法についても観察記録などが多数にのぼっている。しかし、動物の湯浴みが人間の湯治に相当するかどうかについては知見も少なく、科学的なエビデンスの存在ははっきりしない。

② 動物の発見伝説につながる温泉の泉質は、塩類泉が最も多く、次いで含硫黄泉、単純温泉と続く。単純温泉はわが国では多い泉質であり、中国から九州地域では比較的多い特徴がある。注目すべき点は、河野が報告した温泉について泉質の割合を往時(明治時代)の泉質統計の割合と比較すると、塩類泉、含硫

黄泉、炭酸泉が多く、単純温泉が少ないことがわかった。また明治時代の分析表の解析から、往時の湧水・鉱泉・温泉は塩分含量だけでなく、CO<sub>2</sub>、H<sub>2</sub>Sなどを含む温泉、何らかの成分を含む温泉が多いとことが推定された。このことは、泉質統計で表現されない温泉の特性を考慮する必要があると思われる。

③ 動物では、鶴が最も多く、次いで鷹、鹿、猿、鷲、と続く。動物の種類と泉質との関係は必ずしもはっきりしない。ただし、地域的に鹿は東日本、鷲は西日本に多いと言う地域差が認められる。動物の種類からみると、鳥類は冬場の越冬が、動物は狩猟が発見の端緒となっていることも十分考えられる。つまり、昔は山野を狩猟で駆けめぐる生活が主流であり、動物の発見、ひいては湯の発見に繋がるチャンスが多かった筈である。

④ 一般的に化学成分含量が少ない温泉は、必ずしも温泉生物の好ましい環境を提供しないと推定される（水清ければ魚すまずの類である）。したがって、塩分を含む温泉や、CO<sub>2</sub>、H<sub>2</sub>Sを含む温泉は昆虫類などがより生息しやすく、それをねらって、魚類、鳥類などが餌場として集まり、大型動物も集まってくることや、塩類泉が動物に必須の塩分の補給源として何らかの役割を持っていると推定される。このようなことが、動物による温泉発見伝説に係る温泉は単純温泉が少ないことの根拠として考えられる。塩分の存在が生物の生息に不可欠であり、塩類泉が動物発見伝説の温泉泉質の中で最も多いことも、そういった餌場、広い意味では、動物の生活や慣習が密接に関係し、動物にとってよりよい環境を与えていることが関係しているのではないかと考えられる。

⑤ 文献では、動物は本質的に湯浴みを好まないし高温泉には浸からない。しかし、動物によっては、水浴び、泥浴びは習性で、寄生虫や害虫の駆除に関係すると言われている。したがって、積雪期には温泉で解けた水場は水浴びのたまり場として機能しており、水浴

び、泥浴びの習性が動物の生活の基本にあつて、それに餌場が関係して、発見伝説につながっているのではなからうか。

⑥ 筆者としては、人間と同じ湯治を動物はしないけれども、浸かることで温泉が他の水よりも気持ちがよく、体調の維持・改善程度を意識しているように考えている。何れにしても、動物の水浴び、泥浴びなど野生動物の習性、さらには水質との関係についての検討が基本的には重要であるので、動物学者や獣医師のご教示を得たいと思っている。

## 謝辞

この報告を策定するに際し、ご指導を頂いた東京理科大学長島秀行先生に厚く感謝したい。

## 参考文献

- 1) 甘露寺泰雄 (2007): 「動物が発見した温泉をめぐって」温泉、75巻、5/6月号、14～16頁。
- 2) 西川義方 (1937): 『温泉須知』、診断と治療社出版部、402～403頁。
- 3) 伊東祐一 (1942): 『温泉の科学』、三省堂、228～243頁。
- 4) 河野忠 (2007): 「温泉発見・開湯伝説から見た泉質と効能に関する予察的考察」、大分県温泉調査研究会報告、第58号、31～40頁。
- 5) 内務省衛生局 (1935): 『全国鉱泉調査』、253頁。
- 6) 内務省衛生試験所 (1912): 『衛生試験彙報』、第十二号、250頁。
- 7) 野口冬人 (1998): 『全国温泉大事典』、旅行読売出版社、986頁。
- 8) 厚生省国立公園部編 (1954): 『温泉必携』、221～335頁。
- 9) 鷹司信輔 (1952): 「温泉と動物」、温泉、20巻、5月号、20～22頁。
- 10) 平野威馬雄 (1955): 「鹿が傷を洗う埋沢」、温泉、23巻、1月号、52～55頁。
- 11) 古賀忠道 (1956): 「動物と温泉」、温泉、24巻、1月号、50～51頁。

- 12) 末広恭雄 (1964): 「温泉と魚」、温泉、32巻、8月号、18～19頁。
- 13) 石内展行 (1975): 「お風呂の好きな動物たち」、温泉、43巻、8月号、12～13頁。
- 14) 石川一雄 (1979): 「地獄谷で猿と混浴」、温泉、47巻、10月号、6頁。
- 15) 千葉康由 (2004): 『雪猿乃湯』、長崎出版、103頁。
- 16) 温泉編集部 (1963): 「誌上温泉展—温泉の発見伝説—」、温泉、31巻、3月号、10～13頁。
- 17) シンディ・エンジェル、羽田節子訳 (2006): 『動物たちの自然健康法—野生の知恵に学ぶ』、紀伊国屋書店、331頁。
- 18) W.B.マイヤーロホ、江口英輔訳 (2010): 『知りたいサイエンス 動物の奇行には理由がある、温泉好きな動物』、技術評論社、49～51頁。
- 19) William A. R. Thomson M. D. (1978): 『SPAS THAT HEAL』、Adam and Charles Black, London
- 20) 種村季弘、巖谷國士、川本三郎 (1994): 『徹底討論—温泉主義宣言—』、イマーゴ (imago) 94～11号、青土社、50～51頁。
- 21) 谷畑藤男 (1976): 「残された自然の中で (21) 青き鳩「群馬の自然」、23号9頁; 谷畑藤男 (1978): 「温泉と野鳥」、群馬県温泉史誌、1の1、群馬県温泉協会、7～8頁。
- 22) 群馬県温泉協会 (1987): 『群馬県温泉誌』、245頁; 群馬県薬剤師協会環境衛生試験センター (1995)
- 23) 長島秀行、後藤淳、黒沢武久 (2011)、群馬県野栗沢温泉とアオバトについて、日本温泉地域学会、第18回研究発表大会、発表要旨集、13～14頁。
- 24) こまたん (2004): 「アメリカにも鉱泉を飲むハトがいた」『アオバトのふしぎ』、HSK、98～頁。
- 25) R. Ishizu (1915): 『The Mineral Springs of Japan』、Sankyo Kabushiki Kaisya、26頁。
- 26) 服部安蔵 (1951): 「我国の温泉統計について」、中央温泉研究所年報、第1号、1～7頁。
- 27) 斎藤幾久次郎 (1989): 「わが国温泉地の泉質別分類表の作成について」、(財)健康開発財団研究年報、XI、10～13頁。
- 28) 江本義数 (1967): 「続・わが国の温泉中に生息する生物 (その6)」、温泉工学会誌、Vol. 7, No. 3, 75～108頁。
- 29) 荒木修 (2007): 『おもしろサイエンス 蚊の科学』、日刊工業新聞、68～70頁。
- 30) 萩原恭男校注 (1980): 『芭蕉おくのほそみち』、岩波文庫、20頁。
- 31) 小澤清躬 (1938): 『有馬温泉史話』、五典書院、353～356頁。
- 32) 加藤玄知、宮坂光次 (1935): 『温泉大鑑』、658～661頁。
- 33) 木暮敬、萩原進 (1980): 『群馬の温泉』、上毛新聞社出版局、197、127、136、142、208、216頁。
- 34) 松山市観光協会 (1982): 『道後温泉』増補版、松山市観光協会、40頁。
- 35) 山形県温泉協会 (1973): 『山形県温泉誌』、164～165頁。
- 36) 別府市観光協会 (1963): 『別府温泉史』、292～294頁。
- 37) 吉野妙子 (2010): 「動物たちにみる温泉健康法」、温泉やまがた、第167号、10頁。

## 追 補

温泉生物については、前述した江本の詳細な研究があり<sup>28)</sup>、「温泉生物の最も多く出現する泉質」の出現数を、今回の泉質分類で整理すると、表6のようである。

この結果、温泉植物と温泉動物の泉質上の出現数には特徴的な違いがある。すなわち、温泉植物では、塩類泉が出現数が最も多く、温泉動物では単純温泉が出現数が最も多い点である。含硫黄泉は、植物・動物共に頻度で大きな差はない。温泉植物で出現数の最も多いのは、藍藻類で珪藻類がこれに次ぎ、緑藻類、細菌類とつづいている。温泉動物で最も出現数が多いのは、原生動物の繊毛虫類で、



昆虫類がこれにつづいている。

温泉植物で塩類泉や含硫黄泉が頻度が多いのは、塩分や硫黄分が生物の生活に必要な成分と考えられるが、温泉動物では、単純温泉が頻度が高いのはなぜであろうか。恐らく、本文で述べたように、単純温泉は塩分が1,000mg/kg以下の温泉で、含有成分の種類

は問わないので、泉質に現れない成分、たとえば、CO<sub>2</sub>やH<sub>2</sub>Sが含まれている点を考慮すべきであると述べたが、それ以外に、例えば原生動物と昆虫類の共存が関係しているのではなかろうか。この問題については、生物の食物連鎖とも関係しており、今後の研究課題と考える。

表6 温泉生物の最も出現する泉質

温泉植物				温泉動物			
泉質	略記	出現数	(%)	泉質	略記	出現数	(%)
塩類泉	A	358	83	塩類泉	A	24	13
単純温泉	B	21	5	単純温泉	B	149	80
含硫黄泉	C	46	11	含硫黄泉	C	10	5
炭酸泉	E	2	1	炭酸泉	E	1	1
その他	S			その他	S	1	1
計		427	100	計		185	100

(注) 江本義数(1967)の資料により筆者作成。

# タイ・サンカンペン温泉における温泉観光開発 The Development of Spa Tourism in Sankamphaeng, Thailand

浦 達雄\* 小堀貴亮\* 中山三照\*\* ポーパンティップ\*\*  
Tatsuo URA, Takaaki KOBORI, Mitsuteru NAKAYAMA, Jariwat PHOLPHANTIP

キーワード：タイ (Thailand)・サンカンペン (Sankamphaeng)・温泉観光開発 (spa tourism development)・経営動向 (business trends)

## 1 はじめに

### (1) 研究の背景

タイには200以上の温泉地がある(図1)。主な温泉地は、タイの北部(チェンマイ周辺)・中部(バンコク周辺)・南部(マレー半島)に展開している。タイにおける温泉地の成立・発展の詳細は定かではないが、カンチャナブリー県のヒンダット温泉のように日本軍が開発した温泉施設が現在でも有効利用されており、その歴史は第2次世界大戦前までさかのぼることが出来る<sup>1)</sup>。さらに、温泉を付帯する寺院も散見され、カンチャナブリー県のワンカナイ寺では温泉施設を無料で開放して、客が多い。

タイ北部に位置するチェンマイ周辺は、タイにおける温泉集中地区を形成している。温泉は熱帯の気候ではなじまないと思われるが、東南アジアで日本軍が開発した温泉として、パプアニューギニアのラバウル、マレーシアのポーリン温泉などが知られる<sup>2)</sup>。

タイは熱帯の国であるが、北部に位置するチェンマイ付近は、冬の気候は冷涼となり、温泉利用の環境が整っていることも、温泉施設の増加につながっていると思われる。

本稿では、チェンマイ周辺を調査地域に設定した。その理由は、タイにおける温泉集中地区であること、新旧の温泉施設が多いことなどである。特にチェンマイ東郊のサンカン



図1 タイにおける主な温泉地の分布  
(注) 高橋(2008)原図を小堀貴亮改図。

ペン温泉は、温泉施設が集積しており、調査地域としては好例と判断し、野外観察や聞き取りなどの現地調査を実施した。

### (2) 従来の研究成果

タイにおける温泉観光開発に関する論文は、観光地理学の分野では見当たらない。普及書としては、高橋由紀夫の著書<sup>3)</sup>がある。本書はタイにおける温泉施設の旅行記・概説書であり、旅行者や温泉マニアの立場では、利用価値が高い。雑誌では、若干の成果が見られる。松下正弘<sup>4)</sup>は、主にタイ北部の温泉の概要をレポートしており、先駆的な内容

\*大阪観光大学 (Osaka University of Tourism) \*\*ラチャプリュックカレッジ (Ratchaphruek College)

と言えよう。浦達雄他<sup>1)</sup>は、カンチャナブリー県における2カ所の温泉施設での聞き取りをもとに経営動向の概況を報告し、サンカンペーン温泉についても旅行記風にまとめた。なお、地質調査所<sup>5)</sup>は、タイ北部の温泉の温度別分布を図示しており、研究・調査の初期の段階では、参考になる点が多い。

### (3) 研究の目的と方法

本研究の目的は、温泉集中地区のタイ北部、チェンマイ県サンカンペーン温泉を事例として、温泉施設の経営実態を明らかにすることである。研究方法は文献調査、現地での聞き取り調査である。経営数値を中心に聞き取りを実施し、その概要の把握に努めた。

## 2 サンカンペーン温泉の概要

### (1) タイ北部における温泉地の展開

タイ北部は、温泉3大集中地区の1つである。特にチェンマイを中心として温泉施設が点在し、県別ではチェンマイをはじめ、チェンライ・パヤオ・メーホンソーン・ランバンなどに立地し、主に山岳地帯に温泉施設が見られる(図2)。泉温は高温泉の多いのが特色で、泉質は硫黄系が目立っている。

### (2) サンカンペーン温泉における温泉施設の分布

サンカンペーン温泉は、チェンマイから東へ40kmの付近に位置する。地勢は山野が主体で、農村地域を形成している。こうした環

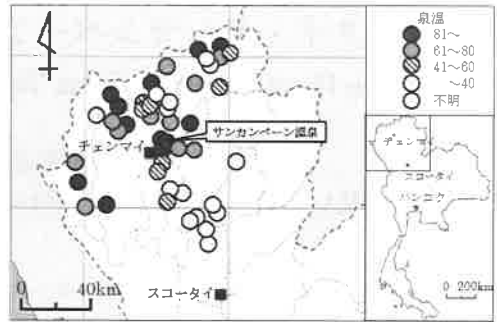


図2 タイ北部の温泉地の泉温別分布  
(注) 各種資料により小堀貴亮作成。

境の中に新旧の温泉施設が点在し、温泉集落は形成していない。図3は、温泉施設の分布状況を示したものである。

表1はサンカンペーン温泉における4軒の温泉施設の概要を整理したものである。その結果、1980年代に開発されたリゾートタイプと、2010年前後に登場した宿泊特化型のタイプがあることが判明した。リゾートタイプとしての①サンカンペーン公営温泉、②ルンアルン温泉、宿泊特化型のタイプとしての①ONSEN、②プリラサイである。以下、その概要と経営の実態を述べる。

## 3 サンカンペーン公営温泉

### (1) 開発の概要

公営温泉の経営母体は村落農業共同体である。地方政府と8村落が共同出資をして経営している。開業は1984年12月22日で、動

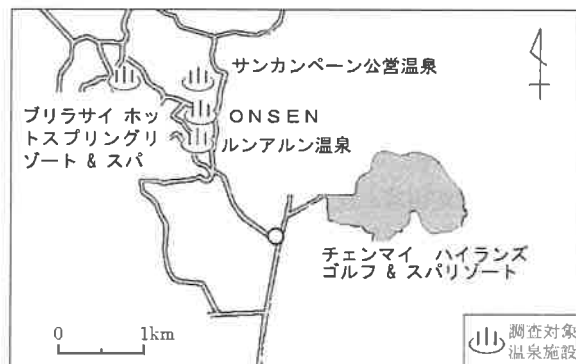


図3 サンカンペーン温泉における温泉施設の分布(2011年)  
(注) 現地調査により小堀貴亮作成。

表1 サンカンペーン温泉の温泉施設の実態（2011年）

	公営温泉	ルンアルン	ONSEN	プリラサイ
開業年	1984年12月22日	1987年	2009年2月	2010年1月1日
初代経営者	村落農業共同体	バンコク 潮州系 薬剤士・製薬会社経	サンカンペーン郡	ビチット県 潮州系 建築業
開業時の職 開業動機	地方政府・8の村落 観光振興(荒地を活用)		住宅開発・販 リゾートの建設	土地があったから
投資額(土地) 投資額(建物)	200万B(地方政府100万B、村 100万B)		5,000万B(森林) 6,000万B アラブ・バリ島・日本をイメージ	1,000万B(森林) 1,000万B
敷地面積	75RAI	100RAI	13RAI	38RAI
温泉掘削年 深度 泉温 湧出量 源泉数 泉質	1984年 100m 105℃ 3本 硫黄系 フッ素、臭素を含む	1976年10月19日 40m 105℃ 240リットル/m 2本 硫黄系 カルシウム、マグネシウムを含む	2005年 3本 硫黄系	2009年 60m 70℃ 3本 硫黄系
入場料金 温泉施設 同料金 宿泊施設 同料金	20B 足湯、プール、男女別個人浴 室など 個室浴場50B、貸切(200B) プール150B、シャワー20B コテージ17棟 普通:1,200B VIP:2,500B	20B 大浴場(水着着用)、プール、 男女別個室浴場など 個室浴場80B、120B コテージ(4室付帯)4棟 コテージ(2室付帯)10棟 コテージ(5人収容)2棟 平日:1,200B 週末:1,500B	なし プール、男女別個室浴場(それ ぞれ10室) 300B 10室 2,500B	なし プール、個室浴場(4室) 150B コテージ大5棟 コテージ小5棟 大:2,200B 小:1,500B
年商 成長率 オン オフ	2,500万B 1・12月 8・9月		100万B~200万B 11~2月 4~6月	1,000万B 20%/年アップ 10~3月 6~9月(雨季)
顧客 従業員数	アラビア・日・韓・中など 外国人は20% 50人	50人	日(40%)・タイ(30%)・韓・米・ 英・露など ゴルフ、セミナー、ロングステイ など8~15人	米・日・韓・中・タイ(他の県) 12~20人
その他	源泉で温泉卵可能 売店の家賃は1,500B/月 年間40万人利用 学生の利用が多い 源泉湧出の見学が出来る 1972年頃、タイ政府が地熱開 発を試みたが資金不足で断念	源泉で温泉卵可能 2008年、温泉水を利用した化 粧水などを開発 源泉湧出の見学が出来る 利用客は、オフで30人/日、オン で70~100人/日 屋号の意味は明るい夜明け	初代女将は食物アレルギーで 2011年死去。 オックスフォード大出身 日本好きで屋号は温泉とする 初代の夫は農園(タバコ)経営 2代目の夫は農園(ゴム)経営 チェンライで1,000RAI所有 2代目女将は26歳 2012年にサウナ開設 年間1万人利用	土地は1990年頃買収 ルンアルンの建設の際、建築を 手伝う。 初代は農園(フルーツ類)経営 2代目(31歳)は建築業 (バンコク) 温泉は飲泉可能 別に3RAIの土地所有(1,800B) 屋号の意味は素晴らしい町 マッサージルーム建設中 水田付帯 隣で韓国の保養施設建設中

(注) 筆者らの現地調査資料により作成。

機は荒地の活用である。温泉施設の敷地面積は75RAI(12ha)で、設備投資額(土地・建物)は200万B(地方政府100万B、村100万B、1B=2.5円)であった。この地は、1972年頃にタイ政府が地熱開発を試みたが、資金不足で断念した場所である。

## (2) 温泉・宿泊施設

温泉は1984年に掘削され、源泉数は3本、深度は100m、泉温は105℃と高い。掘削自噴泉は多量を空中に吹き上げており(写真1、以下写真は浦撮影)。泉質は硫黄系である。

公営温泉の入場料金は大人20Bで、主な

温泉施設として足湯・プール・男女別個室浴場がある。料金は個室浴場50 B、貸切200 B、プール150 B、シャワー 20 Bである。宿泊施設はコテージが17棟あり、料金は普通棟1,200 B、VIP棟2,500 Bである。

### (3) 経営数値

年商は2,500万Bを数え、オンシーズンは1・12月、オフは8・9月である。市場はタイ・アラビア・日本・韓国・中国などで、外国人の利用は20%程度である。タイ人は子供の利用が多い(写真2)。年間の利用客は40万人に達し、スタッフ50人程度である。

### (4) その他

源泉では、温泉卵が可能であり、生卵が売られている。数多くの売店が出店しており、村人が経営に参画している。売店の家賃は1,500 B/月である。施設内は広大な公園として整備されており、源泉湧出を見学出来る。

## 4 ルンア alun 温泉

### (1) 開発の概要

経営者(女性)はバンコク出身で、潮州系である。本業は製薬会社経営で、経営者は薬剤師の資格を持つ。開業は1987年、敷地面積は100 R A I (16ha)と広い。

### (2) 温泉・宿泊施設

温泉掘削は1976年10月19日である。源泉深度は40 m、泉温は105℃と高温である。湧出量は240ℓ/m、泉質は硫黄系で、カルシウム・マグネシウムを含んでいる。入場料金は大人20 Bで、大浴場(水着着用)・プール(写真3)・男女別個室浴場などがある。料金は個室浴場80 B・120 Bである。宿泊施設はコテージ(4室付)4棟・コテージ(2室付)10棟・コテージ(5人収容)2棟などがあり、料金は平日1,200 B、週末1,500 Bである。

### (3) 経営数値

経営数値は経営者不在で不明であるが、利用者数はオンシーズンで70～100人/日、オフシーズンで30人/日である。スタッフは



写真1 源泉の湧出状況



写真2 温泉を楽しむ子供



写真3 室内温泉プール

50人程度である。

### (4) その他

源泉は掘削自噴泉が湧出しており、見学が出来る(写真4)。売店では生卵が売られ、温泉卵が可能である。2008年からは温泉水を利用した化粧水などを開発し、新事業に取り組んでおり、化粧水は売店で販売されている。屋号の意味は明るい夜明けである。

## 5 O N S E N

### (1) 開発の概要

初代経営者(女性)はサンカンペーン郡の出身で、住宅の開発と販売を手広く行っていた。開業は2009年2月で、開業動機は温泉リゾートの建設である(写真5)。敷地面積は13 R A I (2.1ha)、設備投資額は土地5,000万B、建物は6,000万Bであった。



写真4 源泉の湧出状況



写真5 玄関先



写真6 個室浴場

#### (2) 温泉・宿泊施設

温泉の掘削は2005年であるが、その他の温泉関係資料は不明である。泉質は硫黄系である。宿泊中心のため入場料金は無い。温泉施設のプール・男女別個室浴場（各10室）（写真6）があり、料金は300Bである。宿泊施設はホテルタイプが10室、料金は2,500Bである。

#### (3) 経営数値

年商は100万B～200万Bである。オンシーズンは11～2月、オフが4～6月で、市場は日本（40%）・タイ（30%）・韓国・米国・英国・露などとなる。年間の利用者は約1万人である。利用目的はゴルフ・セミナー・ロングステイなどが多い。スタッフは8～15人程である。

#### (4) その他

初代経営者（女将）は食物アレルギーで2011年7月に死去した。女将はオックスフォード大の出身で、日本を何度も訪問し、日本好きで屋号はONSEN（温泉）と命名した。施設内には日本（浮世絵など）・バリ島・アラブを意思した掲示物や展示物などが多い。2012年にはサウナを開設する予定である。現在、2代目女将が経営をしているが、25歳で若い。初代の夫はタバコ農園を営み、2代目の夫はゴム農園を営んでいる。チェンライで土地1,000RAI（160ha）を所有している。

## 6 ブリラサイ

### (1) 開発の概要

経営者はタイ中部ピチット県の出身で、潮州系である。建築業から温泉事業に参入した。開業は2010年1月1日で、開業動機は1990年頃に買収した土地があったからである。ルンアルン温泉の建設の際に、建築を手伝った関係で、土地を購入した。敷地面積は38RAI（6.1ha）で、設備投資額は土地1,000万B、建物1,000万Bである。

### (2) 温泉・宿泊施設

温泉掘削は2009年で、源泉の深度は60m、泉温は70℃に達する。泉質は硫黄系であり、飲泉可能である。宿泊が主体であり、温泉施設はプール（写真7）・個室浴場（4室）である。料金は150Bで、宿泊施設は、コテージ大5棟、小5棟からなる（写真8）。料金は大2,200B、小1,500Bである。

### (3) 経営数値

年商は1,000万Bを数え、対前年比は20%のアップであった。オンシーズンは10～3月、オフは雨季の6～9月である。市場は米国・日本・韓国・中国・タイ（他の県）などであり、スタッフは12～20人程度である。

### (4) その他

初代経営者は、フルーツ農園を営み、31歳の2代目主人は建築業をバンコクで行



写真7 屋外プール



写真8 コテージ

なっている。近くで別の土地を3 R A I (0.48ha) ほど所有し、出来れば1,800 Bで売却したいと言う。現在、マッサージルームを建設している。水田で生産された米はレストランでの食事に提供される。屋号の意味は素晴らしい町を意味する。

## 7 むすび

以上、タイのサンカンペン温泉における4軒の温泉施設を事例として、その開発の実態と経営状況の概要を把握したが、その結果、次のことが明らかになった。

①温泉施設の敷地は広大である。②敷地内には温泉施設と宿泊施設が立地する。③宿泊施設はコテージタイプが中心である。④温泉施設はプールと男女別の個室浴場（バスタブ）が主体で、日本風の露天風呂・家族風呂は少ない。⑤温泉は自家源泉、高温で湧出量は多い。泉質は硫黄系となる。⑥経営者のタイプは様々であるが、今回調査した4施設の内、2施設が潮州系で、事業意欲に長けている。⑦年商など経営数値は好調で、毎年20%アップの温泉施設もあった。⑧シーズンは乾季と冬季がオンシーズンで、雨季がオフシーズン

となる。⑨利用者の中にはチェンマイでロングステイをする日本人も多い。⑩今後の課題として、温泉施設の継続的な調査を行うことで、タイにおける温泉地の経営形態の一般的傾向を把握し、入湯客の市場構成の変化を調査したい。

## 付記

本稿は、日本温泉地域学会第18回研究発表大会（2011年11月6日・浅虫温泉）で口頭発表した内容を修正・加筆したものである。なお、本研究は、大阪観光大学とタイ・ラチャブリュックカレッジとの共同研究（テーマは「タイにおける温泉観光開発」）の研究成果の一部である。

## 謝辞

現地での聞き取り調査に当たり、各温泉施設の担当者、ガイド兼通訳のパンティラー・シンタイポップ氏に大変お世話になりました。ここに記して謝意を表します。

## 注・参考文献

- 1) 浦達雄他（2011）「タイ・カンチャナブリーの温泉」温泉、通巻840号、3～5頁。
- 2) 浦達雄（2009）「湯遍路旅日記－アジア・太平洋編－」観光&ツーリズム（大阪観光大学観光学研究所・所報）・第14号、12～23頁。
- 3) 高橋由紀夫（2008）『秘湯天国タイだもーん』ゑみ文社、190頁。
- 4) 松下正弘（2001）「タイの温泉（ナムローン）」温泉、通巻749号、26～29頁。
- 5) 地質調査所（1987）「タイ北部における温泉地の分布」同所、1枚。
- 6) 浦達雄（2011）「U R Aの湯遍路旅日記2010－台湾・中国・タイに行く－」観光&ツーリズム（大阪観光大学観光学研究所・所報）、第16号、11～23頁。

### 3.11 東日本大震災後の北東北の観光状況と温泉地経営

## Tourism and Spa Management after the Great East Japan Earthquake and Tsunami in the Northern Tohoku District

谷口清和\*  
Kiyokazu TANIGUCHI

キーワード：東日本大震災 (great East Japan earthquake and tsunami)・観光 (tourism)・温泉地経営 (spa management)

#### 1 はじめに

東日本大震災から1年、メディアは挙って1年前の映像と現在の様子を流す様になった。未曾有の大災害は直接・間接に東日本の温泉地に多大な影響をもたらした。全てを網羅する事は適わないが、被災した温泉地はもちろん、被災しない温泉地でも風評被害などが起きた事にかんがみ、この間の現況を考察する。

#### 2 研究の目的と方法

2011(平成23)年5月の連休を利用して、実際に津波被災地でボランティア活動に参加し、三陸沿岸を調査した。また、青森県内において聞き取り調査を実施した。さらに、報

道資料、関係機関の統計資料などを分析して実態を把握し、震災に対しての観光業者の対応、温泉地の実態と課題をまとめた。

#### 3 被災状況とその後の動向

##### (1) 東日本大震災時後の現状

表1で把握できることは、東日本大震災の凄惨さであり、死者・行方不明者数の19,009名(2012.3.12現在)は、まさに戦争状態の国難と言って過言ではない。我々は、この凄惨な経験・記憶をどの様に観光・温泉地経営に反映させるべきなのかを考えなければならない。

##### (2) 東日本大震災後の旅客輸送人員

次に、実際問題として被災直後の交通イン

表1 東北4県の被害状況

県	被害(億円)	会社廃業	被災漁船	死者	行方不明	震度	津波浸水
青森	1,319	0	616	3	1	5強八戸	11 m
岩手	42,760	182	5,726	4,671	1,249	5強宮古	28 m
宮城	64,920	947	12,023	9,512	1,688	6強仙台	21 m
福島	31,290	87	873	1,605	214	6弱いわき	10 m
その他	28,711			63	3		
計	169,000	1,216	19,238	15,854	3,155	M9震源	最大28m
(資料)	河北4.27	陸奥9.8	河北5.14	警察庁 24.3.11	警察庁 24.3.11	国交省	国交省

(注) ①東奥日報夕刊(23年6月24日)には内閣府推定として、16兆9000億円の被害総額が報じられた。河北新報の東北4県の推定値と内閣府発表を勘案して本表を作成した。②死者の内、身元不明者が478人。③津波は、津波浸水高と津波遡上高の2種類があり、遡上高の最大は宮古の40.5mであった。

\*温泉地活性化研究会 (Workshop of Activation for Spa)





写真1 石巻市雄勝の瓦礫  
(5月5日こどもの日)



写真2 女川町の被災現場  
(被災者自宅跡での昼食の様子)

フラに注目したい。筆者も大震災2ヵ月後の連休に三陸沿岸を調査縦走したが、大変な状況であった。

500kmにも及ぶ広範な被災現場では、救助活動、支援物資にとって交通の確保が重要な問題となった。その後の観光復興も同様で

ある。

表2では、北国青森県の重要な観光シーン(春祭り期)に客足が止まったことを物語っている。特に、1ヵ月間は東北新幹線が全面ストップした影響が大きい。

(3) 青森県内の主要春祭り

表2 青森県の交通拠点などにおける交通量の月別前年比

交通機関	交通拠点	2月	3月	4月	5月	6月	7月	摘要
JR 東日本	東北合計	△ 0.8	△ 34.1	△ 32.7	△ 13.3			JR 在来線
高速バス	首都～東北	4.4	△ 2.9	22.5	△ 3.9	0.1	1.0	輸送人員
ハイヤー・タクシー	青森県	△ 3.3	△ 16.9	△ 12.9	△ 6.7	△ 3.3		
フェリー	青森港	8.5	33.5	71.2	41.5	36.1	△ 17.5	旅客
	八戸港	△ 2.4	△ 71.8	△ 100.0	△ 100.0	△ 100.0	△ 30.6	旅客
航空	青森空港	36.8	△ 19.2	△ 100.0	△ 100.0	△ 100.0	△ 88.6	国際線
	青森空港	△ 26.2	△ 8.7	△ 6.2	△ 18.1	△ 23.9		国内線
	三沢空港	△ 15.7	17.2	34.7	9.7	0.8		国内線

(注) 対前年同月比(%) 東北運輸局資料による。

表3 青森県内の主要春祭りの観光客数と前年比

単位：千人

観光客数	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年
青森春まつり	215	118	198	175	145	127	153	212	136
弘前桜まつり	2,070	2,130	2,560	2,550	2,510	2,180	2,440	2,470	2,010
はちのへ公園春まつり	287	267	313	221	245	239	274	248	222
金木桜まつり	216	152	449	323	442	252	346	295	234

単位：%

前年比(%)	15年	16年	17年	18年	19年	20年	21年	22年	23年
青森春まつり		△ 45.1	67.8	△ 11.6	△ 17.1	△ 12.4	20.5	38.6	△ 35.8
弘前桜まつり		2.9	20.2	△ 0.4	△ 1.6	△ 13.1	11.9	1.2	△ 18.6
はちのへ公園春まつり		△ 7.0	17.2	△ 29.4	10.9	△ 2.4	14.6	△ 9.5	△ 10.5
金木桜まつり		△ 29.6	195.4	△ 28.1	36.8	△ 43.0	37.3	△ 14.7	△ 20.7

(注) 青森県観光企画課資料。

表4 青森県の主要都市の宿泊状況（2011年7月）

施設名	前年比 (%)	今夏の特徴
八戸市内宿泊施設	16.3	高校総体と復興需要により増加
弘前市宿泊施設	8.3	個人客は週末中心に増加
青森市宿泊施設	1.2	
むつ市宿泊施設	3.9	個人客、ビジネス客が増加
十和田湖畔宿泊施設	△36.2	個人客が中心、団体客大幅減（修学旅行のキャンセル）
合計	3.4	

（注）青森県観光企画課資料。

東北管内でいち早く復興祭り開催を宣言した弘前桜祭りは、前年比よりやや減となったが、春祭りの観客は日本一に相応しく200万人台を確保、東北復興の牽引車的役割を担った。

#### （4）青森県内の観光動向

表4は青森県内の宿泊施設は震災後のマインド低下、原発風評被害を踏まえても健闘している事が分かる。しかし、代表的な観光地「十和田湖」は連日閑古鳥が鳴くほどの低迷が数値でも確認される。

そんな中、弘前市の桜祭りの善戦、新幹線新青森駅を抱える新しい観光スポット「ベイエリア」（写真3：八甲田丸、A-FACTORY、ワ・ラッセ）が観光客に好評であった。



写真3 青森の観光スポット・ベイエリア

#### （1）青森県内主要3市（青森・弘前・八戸）でのヒアリング

##### ①青森市

青森市は新青森駅や青森駅前観光案内所を訪れる観光客が多い。JR東日本の「大人の休日」や「東日本パス1万円」の際は沢山の

観光客が首都圏から訪れた。新青森駅観光案内所では、ワラッセ、八甲田丸、アスパムの三館共通券が多数売れた。さらに三内丸山遺跡まで足を伸ばした観光客も多い。4月23日～7月22日の青森DCでは「SL津軽号」が人気で、鉄道ファンなどで賑った。青森ねぶた祭は例年と違い、団体客から個人客の増加へと変化した。実質新幹線元年の今年は、9月B-1グランプリ、日本の祭り、10月ハロウィンパレードが続いた。



写真4 津軽路を走るSL

##### ②弘前市

弘前市は復興支援の桜祭り開催宣言を3月23日にいち早く打ち出し、安全アピールは全国的に反響を呼んだ。その結果、個人客が桜祭りを賑わし、例年並みの200万人の人数で健闘した。「弘前ねぶた」「弘前まち歩き」「ゆかた散歩」「旧館巡り」「グルメ三昧」などの観光選択肢が多く、新旧の見所で観光客をもてなした。

##### ③八戸市

八戸市は震災時には、2月オープンの「はっ



写真5 弘前桜まつり（満開の天守閣）

ち」が臨時避難所となり、観光客や市民に開放され、中心商店街の店主たちが無償炊きだしをし続け、観光客を安心させた。今後の大きなテーマである新「三陸復興国立公園」は、宮城県～岩手県～八戸市と続く、実に350kmの遊歩道などの壮大な自然国立公園構想であり、八戸にとっては震災復興に向けての大きな事業となる。

#### ④ 全県的状况

青森県は東北新幹線全線開業の翌年として、様々なイベント実施を予定していた。その大きなものが、2011年4月から7月までの青森デスティネーションキャンペーンであるが、東北復興をサブテーマに予定通り実施され、弘前青森間を蒸気機関車が走り、沢山の人々に復興へのパワーを与えた。期間中の観光入込数は東日本大震災にも関わらず264万人で、前年比87.8%となった。

また、東日本JRは東北新幹線青森開業記念として、6月23日～7月5日までの期間JR東日本全線及び青い森鉄道線、IGRいわて銀河鉄道線等の普通自由席が4日間降り降ることができる「大人の休日倶楽部パス」を販売した。さらに、青森県は国内客国外客問わず、青森県内の宿泊施設利用者に対して、1泊2,000円の助成を行なう「県内宿泊ツアーに係る商品造成支援事業（予算4,000万円）を実施し、青森県内は後半に向けて観光客が増加しつつある。

## 4 今後の課題

今回の大震災は私達がおかに危うい生活基盤の上に成り立っているかを思い知らされた。しかし、危ういが故に絆を強く持つのも人間社会である。その絆をより強くする経済行為が観光産業である。観光関連事業者は今回の未曾有の災害で多くを学んだ。

『東日本大震災後の観光産業教訓』

- ①物流が途絶えると何も出来ない。
- ②非常時の安全安心の備えが希薄。
- ③観光は一番後に復旧する。
- ④人々の心で左右される。
- ⑤心と身体の癒しと休息を提供できる。
- ⑥活力と元気の源となれる。
- ⑦非常時に育まれた「こころ」は堅い「絆」となり、つながる。

温泉地は復興作業で疲れた心身を癒せる観光現場「日本のふるさと」となり得るか？そのためには、各地域の魅力に気づき、誇りに思うと同時に、被災者の「ふるさと」にも思いを寄せるホスピタリティが必要である。それは、阪神・淡路大震災時に裏日本の温泉保養地が役割を担った事にも通じる。サプライチェーンの寸断によるインフラ混乱の克服、過度な自粛・原発風評による観光サービス業の減収回復、太平洋岸中心の直接ダメージ観光地の早期再生への支援、青森県、山形県、秋田県は超被災県（福島、宮城、岩手）の代替地（観光・農業・漁業）として、復興までの役割を果たす。元の生活を取り戻す、挫けない、負けない、諦めない、・・・私達には、まだまだ沢山の道のりが残されている。

## 5 むすび

「想定外」はもう言わない」とは、今回の東日本大震災、大津波、東京電力福島第一原子力発電所事故から導き出された言葉である。この言葉は温泉観光地の現場にそのまま当てはまる。平素、安全安心を心がけてきた私達であるが、この大地震の前に打つ手はな

かった。その後の津波災禍、原発事故でも全く無力であった。災害当時、観光産業に従事している方々が、どれだけ適切な対応をとれたのであろうか。深い反省で一杯である。失われた観光シーンの復活は気が遠くなるものであるが、東北は被災圏として全国の温泉観光地と連携し支援を得て再生されなければならない。再生とは、単に温泉観光地に観光客が来ると言うことではなく、東日本の観光地、被災現場が元の生活を取り戻すことに他ならない。

青森県は、国内外から一人でも多くの観光客を東日本へ誘導する旗頭の役割を担うことにより観光立県としての本来の姿を取り戻し、東日本の温泉観光地の再生に寄与する事が出来るものとする。



写真6 浅虫温泉の景観

日本温泉地域学会第18回大会会場ホテルのある浅虫温泉の景観。



写真7 日本有数の黒い湯（東北温泉）

日本有数の黒い湯のある東北温泉の外観であり、復興支援エクスカージョンの視察地である。



写真8 八甲田山麓の秘湯（蔦温泉）

復興支援エクスカージョンの会場で、宿泊した蔦温泉の外観。



写真9 恐山の温泉浴場

恐山山中の混浴の「花染の湯」湯小屋。霊場の恐山には大震災後多くの被災者家族が訪問した。



写真10 下風呂温泉

本州最北の海辺の下風呂温泉は、震災後は宿泊者が途絶えたが、1年後には見事に復活した。

## 参考文献

- 1) 財団法人日本交通本社編 (2011)『東北の観光状況に関する調査ヒアリング調査』37頁
- 2) 朝日新聞、読売新聞、日本経済新聞、河北新報、東奥日報、陸奥新報の報道。
- 3) 青森県観光統計資料、政府諸統計資料など。

## シンポジウム

## 東日本大震災復興支援

- |          |        |                |
|----------|--------|----------------|
| コーディネーター | ： 浜田眞之 | (国際温泉研究院代表)    |
| パネリスト    | ： 蝦名幸一 | (浅虫温泉旅館組合長)    |
|          | ： 大沼伸治 | (東鳴子温泉大沼旅館)    |
|          | ： 谷口清和 | (青森県温泉地活性化研究会) |

浜田(司会)：まずはパネリストの方々に蝦名さん、大沼さん、谷口さんの順番でそれぞれ違った立場から3.11震災後の状況を話していただこうと思います。最初に蝦名さんからお話を伺えますでしょうか。

蝦名：震災の前は新幹線の開通で前年より20%客数が伸びていました。1月は48%、2月は54%と嬉しい悲鳴だったのですが、震災以後はぱったりと客足が途絶えました。

3月11日は懐中電灯で何とか凌いだのですが、ローソクが必要だと思い、考えてあちこちのお寺を巡って分けていただきました。その時におられたお客さまには翌日も泊まっていたいただきました。幸い浅虫温泉は被災がゼロで、それを他の地域にアピールして地道な支援活動をしております。新幹線ができて20数通りの企画を考えていたのですが、それが駄目になって、中味を新たにしてみたい実施することを考えています。そのためには、お客様を呼ぶ必要が先ずあるのですが、原発のある福島を通りたくないという方が多くて、我々にとって原発問題が避けて通れない難しい課題として浮上ってきています。ましてや外国人を呼ぶことの困難は、さらに大きいのだと感じているところです。

大沼：我々の鳴子温泉郷は震災の後、大崎市の尽力もあってすぐに被災者の受け入れを表明しました。千人以上の被災者が滞在していました。家を流された被災者で5ヵ月滞在された方もおられました。

旅館の経営は結構大変なのですが、それを

何十年もやっていると苦しいことも多かったのですが、震災が来て、もうこれは何をやっても駄目だからと思うと、震災直後は何か重圧から解放されたという気分になりました。ただ翌日の3月12日に掘削自噴の井戸から濛々と立ち上る湯気を見ていると、変わらない自然の力と鳴子温泉の千年の歴史を見るようで、先祖の計らいのおかげで自分があると思うようになりました。温泉を無料開放したのも、自然の恵みで活かされているのだから、それを皆様に提供するのは当たり前だという一種の公共精神の発露だったのかもしれない。

谷口：私は用意したスライドがあるのでそれを御覧に入れます。下風呂温泉も野辺地温泉も人が来ていません。交通途絶といった感じですが。この写真は恐山です。土日なのにバスが列を成していません。

青森県は一年前に新幹線が来まして、先ほどの蝦名社長の話ではないですけど、それ行けムードですよ、パンパンお客さまが来ていたのが3.11でストップ、もしくはマイナスになりました。3.11は考え直す機会になりました。どうしたらこの不測の事態にお客さまに心地よいサービスを提供できるかって、皆さん一生懸命考えたんですよ。新幹線が来たら、お客さんをどうしようかって、みんな考えていた筈なんだけど、いつの間にかたった3ヵ月間ですけど、忙しい、忙しいって追われてしまったかもしれないんです。ですから、そういう面ではおもてなしの意味を考え

るきっかけになったのかなという気がしません。

**浜田**：震災直後、石川副会長の考えで湯治場こそ被災者の受け入れに最適な場所であることをもっとアピールしてはどうかという議論を日本温泉地域学会の常務理事会でしました。湯治場だったら、家族4人で一人当たり5千円を貰えば、2万円ですら十分生活できるというシステムが確立しているのに、それを利用しようという国策的な発想がなかった。また湯治場であれば、3家族、4家族が一緒に移動して、一部屋お借りして、自炊して暮らしていけば心理的なケアも少なく済む。だから先ず第一に使うべきなのは、温泉地でも一泊3万円とか4万円の高級旅館ではなくて、そういう湯治場を活用するというアイデアが真っ先に出てこなかった。まるでJTBさんが仕切ったような形になってしまって、そこで割り振るっていうのは効率的ではあったかもしれないけど、温泉地の活用としては今ひとつの発想ではなかったかと思っていますのですが、現実に大沼さんいかがでしょう。

**大沼**：3.11の後には本当にお客さんが来ませんので、そういう状況で市長が受け入れ表明して、沢山の方が来て頂き、本当に宿側としても有り難かった。本当に全部流された着の身着のままの方々が、温泉に暖かく入って、三食提供されるというような状況は、ある意味良いマッチングだったのかなと思います。しかし、今回は全てのお宿さんに被災者が入ったわけではないんです。あるお宿さんですと集落200人近く全部そのまま受け入れるところもあれば、2～3家族のところもありますし、まったくないところもあるというような状況です。高度成長期からずっと鳴子なんかも大型化して、どんどん観光化してきたわけなんですけど、三ヶ月、四ヶ月という滞在者を自分のところの温泉で受け入れることによって、その湯治の意味をもう一回認識した貴重な機会になったのではないかなと思っています。施設に下りるお金というのは二次避

難所という扱いなので、小さなお子さんでも5千円来るんです。これは県から来るんですけど、要援護者というお子さんやお年寄りや身体の不自由な方々が先ずは対象になっていたのです。そう言った意味で浜田さんが仰ったように、良い温泉があって、滞在する設備はかなり揃っているところが、日本全国や東北にも沢山ありますから、日頃からそういうリスク回避のような意味で何か起きたら取りあえず湯治場に避難するという一つのシステムもあって良いのかなと思いますね。

**浜田**：広域の温泉地ネットワークみたいなものがあるって、大きな天変地異があった場合、震災があった場合には、こういう風に受け入れましょうっていう仮定のことをしておいても良いわけですね。

我々日本人は、嫌なことを想定するというのはあまり好まないですね。言霊思想があって、言葉にして出すと、それが実現してしまうというような発想を我々はどこか心の奥底に持っています。それを今回払いのけて、天変地異があって、それに対して温泉地が適切な救済を提供しうるのであれば、温泉ネットワークみたいなものを一度作ってみたいと、私は思っているのです。

**谷口**：正に私どもの日本温泉地域学会が、そういうことを提言していかなければいけない立場にあると思います。

**浜田**：そうですね。さっき蝦名社長が蠟燭を探しにお寺に行ったと聞いて感激したのですが、なるほどお寺さんにはあるだろうと、そういうのは地元でないに出てこない発想です。ただ今、我々は青森県にいますので、本当に被害を受けた宮城、福島、岩手の温泉地に対しての復興というアイデアには繋がっていない部分があると思うんです。青森が元気になって、自分たちの復興と一番ひどい被害を受けた温泉地の支援あるいは復活というのは、どう結びつけたら良いんでしょうか。ちょっとこれは難しすぎる課題なんで私自身も答が出ないのですが。

谷口：その答えになるかどうか分かりませんが、この災害で幸いにも、勿論鳴子温泉も健在ですしね、日本海側も青森県も浅虫温泉を含めて健在ですよ。こういう健在な温泉地が、もう少し元気を出し、今以上に元気を出して、日本からはまた世界からこの東北に先ずお客さんが来て欲しい、ともかく今年だけでも良いから東北を一杯の人で埋めて欲しいと、そうすると先ほど言ったように失われかけてきたおもてなしが復活するし、温泉地が賑やかになる。その代わり九州で大変なことが起きたら、今度は私達が力が付いてますので、九州をまた支援すると、これは先ほど浜田先生が言ったようにネットワークなんですよ、相互扶助のネットワークなんですよ。ですから、知らず知らずそういうものができて行けば良いのかなと、思っております。

大沼：蝦名社長さんが福島原発の話をして、青森にもそういう影響があるんだと一寸驚きました。宮城県の県南は福島県との県境ですので、どちらかと言うと渦中の地域なんですけど、青森でさえもその福島を越えてくのに、懸念を示される方があるということで、大変な東北がイメージ的にダメージを受けたのだと思いました。

全国各地から世界中から大変な御支援を頂きました。私は、この半年くらいで一生にこんなに人と会うかなというくらいの方々とお会いするような機会がありました。東京大学で日本の近世文学を教えているロバート・キャンベルさんという先生がおられて、よくクイズ番組なんかでは日本人以上に日本のこと詳しくて、優勝したりする方なんですけど、たまたま3月31日に家の方で東大のゼミをやるという計画をされていて、それが震災で流れたんですね。その後、彼はハーバードで講演するというので行ったら、日本から来たということで取り囲まれるらしいですよ。質問されることは原発ではなくて、あんなに凄いことが起きたのに、日本人は冷静さを保って行動できるのかと驚かれたというこ

とでした。彼が震災を受けた方々に今後何かをしようとしたときに、直接的に被災の話をするのはなくて、なにか一つの本を読んだり、小説を読んだりすることで心を和らげたり、コミュニケーションができるようにするというのを10回企画しました。各宿毎に被災者の方々のお宿のリーダーって作るんですよ。今度はこんな音楽聞かせたいんですよ、今度はピクニックに行きましょうとか、いろんな慰問っていいのですかね、そういった方々が毎週のように来ました。リーダーに一応お伺い立ってるんですが、済みませんスケジュールが一杯で来月にして貰えますかと、それくらい毎週のように全国からいらっしゃった。ある意味、日本人って何か起きたときに無私の気持で訪れる、やってきてくれる人がいるんだと今更ながら本当に驚いておりました。肉体労働とかできなくて、若い女性の方がほとんどなんですけど、自分で手作りのお菓子とか作ってきたり、挽きたてのコーヒーを被災地で入れたり、マッサージをして差し上げたり、話を聞いたりするのがソフトな支援なんですけど、そういう一般の方で支援とか何かしたいという方々がおられるんですね。

取りあえず着の身着のまま湯治場に避難して、やっと仮設に移ったという段階ですので、これからどんどん逆に問題が深くなっていくというか、仮設に入っていくと問題が見えなくなるんですね。ですから、これからでも矢張りいろんな温泉地が一つのクッションになったりしながら、何かそういう支援ができれば良いかなと思っています。

浜田：先ほど谷内さんの御意見で被災をあまり受けていない青森、秋田、山形が元気になって、そこにお客さんを吸い寄せれば、矢張り東北として全体としてパイが増えてくるのだろうと、勿論大きいのは被災を受けていない方であっても、当然それが波及をやって、被災を受けた岩手、宮城、福島の方にもその力が加わって行って復興できるか



も知れないという意見ですよ。私はそれに賛成なんですけど、ただ我々は世界の中の日本という自分の立ち位置が見えていなくて、今回分かったことは日本って意外に嫌われていない、寧ろ好かれている、勿論フランスから原子力のアルバの支援が来たというのは、データも取ろうと思っているし、日本の原発に対して何らかの商売をしようという意図もあるでしょうけど、かなりの部分が善意の行為があったと思っています。だから、そういう意味では世界中からお客さんと呼び寄せると言うことが、戦略として東北地方は考えられるのではないかと仰ったのが蝦名さんだと思うんですよ。原発の問題をどうするかってかなり難しい問題なんですけど、取りあえず経済復興という面に絞ってしまえば、これから当然経済復興のお金は下りてくる。その時にやるべきことは復旧ではないと思っているんですよ。単に元に戻すだけではなく、仙台港なんかで港を前に戻すのではなくて、ハブ空港の比喻で言えば、ハブ海港という発想もできる。そうすると物資の中心として物凄い港湾機能でもって物が動いていく、そうすると近代化することによってそこに雇用も発生する。だから神戸震災の時にもし私が仮に総理大臣だったら神戸港のハブ海港化を目指したに違いない。だからそれによって経済を復興させて、いつまでも被災した方々を何かそのいろいろな保護のお金で生活していただくというのではなくて、矢張りそこに新しい職を生み出して復興をやるべきである。その場合に温泉地というのは癒しの場になって、単に経済が活況を帯びているという場ではないところの場所として矢張り存在し続けるから、また価値も出てくると思います。

これから先は、会場の方からの疑問なり意見なりを伺いたいのですが、どなたか意見を言いたいという方はおられますでしょうか。

仮に私が纏めるとすると、矢張りこれから急場の時にどうするかということをよく考

える、インフラの中でもガソリンか何かが一番重要である、それから今後温泉地を活用する場合には温泉地ネットワークみたいなものを上手に作っておいて、被災者の受け入れをやってあげば、今後の震災に対しては日本は少し強くなるのではないかとということまでは意見が出てきたのですが、何か御質問とか私はこう思うとか、会場の方々、ございませんか。

浅利：浅利と申します。とても面白い話を伺っていて、大変ありがたいのですが、今のお三方と浜田先生のお話を伺っていると、基本的に現場の方っていうのは本当によく頑張っているのだっていうのが分かります。私は東京で被災したわけですが、東京にいる人間だってパニックを起こさなかったとか、いい話が多い訳なんですけど、一方においては夏に石巻に行った時はまだまだ瓦礫になっていて、現場は頑張っているけど行政は何しているの、ちょっとステレオタイプ的な話なんですけど、つまり建築制限が掛かっているから、自分の家が流されても、自分の家を復旧することすらできないという、それはさっき浜田先生が仰った復旧と復興の違いということを行政がまだ明確にプランとして示していないということにあると思うのです。そこから振り返ってですね、今温泉地で例えば大沼さん被災地の近くにいらして、その行政に今一番してもらいたいことって何なんでしょうか。

大沼：鳴子に関して言えば、大崎市というのが一番近いのですが、今回の受け入れの時も随分と奔走していただいて、新たに人を増やして毎日被災者がいるお宿とかを回るんですね。沿岸部の被災している行政のところと我々のように軽度な被害で済んでいるところは結構、行政も違うと思っています。僕は全然行政を養護するつもりもないのですが、行政の人自身も被災者なんです。海に行く。肉親も流されて亡くなった方が沢山いるんですね。その中でとにかく食料も一番最後

に回されてくるとか、どうなっているんだと怒鳴られまくるみたいな感じです。現場に入ると、行政はどうなっちゃうだろうというくらいに気の毒なくらいなのが現状です。行政自体が南三陸なんか全部流されて、住民の台帳も何もないのですから、その機能の根本的なことからなくなっていますので、かなりの混乱というか、想定外以上のことが起きています。すぐに上手く機能できるかという分に関しては、僕は何とも言えません。ただ大崎市に関していえば本当によくやっているなと思っていて、もっと大きな意味で言えば、どういう風な青写真を作って今後どうしていくのかっていうのは不安ですね。ヘリコプターで上から見て、現場から乖離している方々がそこで机の上で決めちゃうような感じがしているので、もうちょっとボトムアップが必要かなと思っております。

蝦名：話は変わるんですけど、温泉を使って何かしようにもお金が掛かりすぎる、旅館業でそんなに儲かるわけがないので、もっと行政の方でバックアップしてくれるような体制があれば、もっと変わった温泉地ができていくんじゃないかなと思っていますね。青森の方にも被災者の方がお出でになったんですけどね、矢張り話したくて仕方がないんですよね、手がなくなったとか、足がなくなったとか、そういう姉弟がいるんだということを言うわけですよね。それを客室係にはお客さまがそういう話をしたときには、ゆっくり聞いてあげてくださいと指示してますけど。

浜田：石川副会長が温泉地というのはアジュール、政治的な迫害とかから逃れてくる場所だとよく仰るのですが、何らかの形で困難を抱えた人達が来て、その癒しを得る一種の聖地なのだろうと私も温泉を考えているんです。ですから、それを基本にして温泉地づくりをしていくということは、当然被災者の受け入れということもその想定の中に入ってくるのではないかと思います。

会場：あの質問も入っちゃうんですけど、今

回の大沼さんのお話の中で石巻を受け入れたという事例の中で、全国温泉協会というのはそういった湯治を含めて、支援するということを発信したんでしょうか。と言いますのは、私自身社会福祉協議会にも関わることをやっているんですけど、そこでは自分たちの地方の機関を使って受け入れるという発信なり施策をしたんですよ。その原資は赤い羽だとかいろんな募金で動いているんですけど、そういった部分での温泉協会のネットワークが、今回大沼さんにも波及していたのかどうか、興味あることも含めて我々のやる事業にも考えてみたいと思うのですがいかがでしょうか。

浜田：日本温泉協会という組織があるんですけど、これは各県の温泉協会の上部組織ではまったくないんです。ですから、長野県温泉協会と日本温泉協会というのはまったく対等な関係で、たまたま長野県温泉協会は日本温泉協会の会員として入っていますが、下部組織ではありません。まったく別の組織です。日本温泉協会がこの震災の後にアンケート等で幾つかの調査をされましたけれども、例えば湯治場をもっと活用すると国に働きかけたらどうかっていうことは、彼らの行動の中には入っていませんでした。ただ、各旅館のいろんな大物がいますので、個々に動いたということはあると思うんですけど、日本温泉協会として全国の温泉地に号令をして、こういう風にしましょうと明確なプランを出しませんでした。そう言う意味では、今回の震災を受けて、日本温泉協会なり各県の温泉協会なりが、そのための非常対策を考えておくべきだということは、多分非常に意義があるのではないかと考えております。ですから答としてはノーであるとなります。但し今後やるべきことではあります。

石川：石川と申します。蝦名さんのお話に感動したんですけど、このリスク管理に関して、何年も前から温泉地域学会の会員である大阪芸術大学のシャピロ先生が全国の温泉地

に防災管理のアンケートをされていて、その発表をお聞きした限りでは、最低限の危険に対する管理を温泉地の割か二割くらいしかやっていない。まさかの時を支えるのが本当のもてなしの前提ではないかと思いたすので、是非これは全国の温泉地に発信したいと思っています。

二番目に私もジャーナリズムに関係していますので、3.11の前は新燃岳の風評被害でまったく何の影響も霧島温泉郷にはないにも拘わらず、鹿児島の人すらパタッと行かないという状況が起きました。ジャーナリズムのなかで、3.11以降温泉の出版界はまったく止まりました。これは今、温泉なんて話をしても絶対何とかがって言われちゃうという発想だったんですね。ジャーナリズムは恰も自分たちが何かやっているかのように言いながら、他人事のように自粛をする。リスクをちゃんと考えた上で、温泉地や旅をする、やはりお金を落としに行くということをやつていかないと、自粛のスパイラル、悪循環に陥るような気がいたします。それから、原発問題は本当に深刻な問題なんです、子供さんを抱えた家庭に福島温泉地に行こう、東北の温泉地に行こうと言っても、現実に一抹の不安があると思います。ここは私も団塊の世代ですけど、リタイア世代はゆとりがあるわけですから、特に60代の大人が多少のリスクを含めて、温泉地や観光地に出向いていく、ようやく今連休以降少しづつそういうモードになってきましたけど、やっついていく必要があるんじゃないでしょうか。古い言葉ですが、大人達から一点突破で旅をし、温泉地で癒しに行くと言うことが必要かと思いたす。四番目は先ほどコーディネーターの浜田さんが仰っているように、実は3.11が起きたときに、被災者の方の仮設住宅建設までの時間がかかるだろうとすぐに思いました。それで確かに知事自身は行政が観光庁からすぐに温泉地を被災者の受け入れ先としてやつた、これは正しかったと思いたすが、問題は

先ほど浜田さんも仰つたように中味ですね、要するに一日三食付き5千円の枠内で支援する、これも大いに素晴らしいことなんです、実は一日三食付き5千円と言つたときに、私なんか、これこそ湯治場だ、しかもこの被災者の三陸海岸や太平洋沿岸の方がメインのお客さまだった宮城県の温泉地や、福島でも内陸部、それから岩手県、まあそういうところの湯治場が無数に日本の温泉文化としては誇らしいところがあるのに、そこで恐る恐る電話したら、全然ない。私も内輪の話になりますが、観光庁の直接の面識はなかったのですが、電話しました。ひょつとしてこの一日三食付き5千円には湯治場が含まれているんでしょうかと聞いたら、含まれているような含まれていないような微妙な言い方で、結論から言うと、湯治場のことは想定していないんですね。変な言い方ですが、今の日本の温泉地というのはお客さまを矢張り短期間、一泊二日でおもてなしをフルにするという意味では素晴らしいノウハウを持っていらっしやいますけど、本来東北の温泉場、湯治場ならコミュニティ単位で泊まれて一カ月でも二カ月でも半年でも生活できる、しかも自由にコミュニティの自炊場で食事も自分の好きな物が作れる、一泊や二泊だったら高級旅館の料理は素晴らしいですけど飽きてくる、しかも国からの支援ということで、被災者の方が矢張り何日も滞在するにつれて、段々自分の居心地が恐縮に部屋の中に閉じこもつていく、ところが東北の湯治場にはコミュニティのサロンがあるわけですから、温泉地全体が受け入れれば、温泉地のいろんな付き合いの場とかですね、あると思うんですけど。本当は今回の3.11の事態が教えたことは日本の温泉地はその内部にメニューとして、湯治場的な本来の人間を長く滞在しウェルカムで受け入れて、ある程度今日は大沼さんとこの美味しい料理も食べたい、蝦名さんとこの素晴らしい源泉を利用した料理も食べたいけど、今日はカレーライスを作りたい

い、または自炊場ですね、まあワインも飲みたいとかですね、そういうような本来の矢張り、食と泊の古くから言われている分離も含めたメニューを揃えておくべきではないかと思いました。現実には大手エージェントが入ったということで、なかなか大きなお宿さんが最優先で被災者の方を受け入れましたけど、是非仮設に入っていらっしゃった被災者の方ももう一度東北の温泉場に暫く来ていただくような、何かそういう働きかけとですね、そこで安らいでいただく、それから離ればなれになったコミュニティの人達が、一箇所に纏まるような形ができるのではないかという風に思っています。最後ですけど、これは浜田さんの専門分野なんですけど、こういう大震災をきっかけに地熱開発が国策となっています。これは受け止めるべきことなんですけど、温泉熱エネルギーの総合的な利用という意味で現実的には日本の伝統的な温泉地はこれに対して非常に抵抗を示しています。ただこれがもう一度国民的な形で是非これを機会に熱エネルギーの利用と言うことも温泉地と政府が具体的な着地点を見だしていくことが必要ではないかと思えます。復興と共にそういう次の課題も出てきていますので、何かそういうきっかけになればと思っています。

浜田：有り難うございます。もう纏めに入っていたいただいたような感じでしたけど。その60歳過ぎた世代はもっと貢献しようじゃないかに私も大賛成でして、仮に今多少福島の放射能の問題があっても、20年後に癌の確率が5%上がる、80の時に5%上がってもどうだって良いじゃないかと。だから私はお酒を飲むときに、最近では霧島の焼酎か、あるいは宮城、福島の日本酒かとかそういう風にして貢献しようと思っています。

そう言う意味では、それこそ我々より上の世代は温泉に対して貢献ができます。そこで一番最後に仰ったエネルギー問題、これは正確な数字を知らないと駄目なんです。この前も日本温泉協会から頼まれて温泉という雑

誌に書きましたけど、要するに温泉のエネルギーというのはどれくらいあるか。簡単に言うと、仮に今の地熱発電としてやった場合、日本はあと2千万キロワットくらいできます。原発にしたら20基分くらい、それから高温岩体という別の方法もあるんですが、これもまあやってみると3千万キロワット、原発にしたら30基分くらいできます。それ以外に火山発電という方法はあるのか、昔マグマという本が書かれまして、そのストーリーは、日本が世界の原子力委員会から原発止めてくれてと言われるんですよ。で、分かったと、止めてやろうじゃないかと言うので、地熱発電、マグマ発電に挑むのです。結果は大成功するっていう話なんですけど、では地熱発電や高温岩体発電というその日本にある火山とかマグマを使った場合にどのくらい発電ができるのかって言うと、62億キロワットなんです。この単位は何かっていうと日本が全部使っている発電容量、2億4千万キロワットです。これの一桁違うものがあるから、できなくはない。ただし火山にしるマグマにしる、我々の玩具ではない。私の恩師の一人である小坂文予先生がいつも釘を指されるのは、「浜田君ね、火山は玩具じゃないよ」、「地震も玩具じゃない」、「台風も玩具ではない」。だけど我々、天変地異っていうか、災害と共存する国土作り以外に多分日本っていう国の生きる道はない。だから例えば、台風なんかがあって洪水が起きます。そういうところに河川のギリギリまで家を建てるのは多分間違いないだろう。簡単に言うと、所謂河川敷には公園とか野球場とか、流されたら作り直せばいいや、そういうものを作っておくっていう発想をすれば、ある意味で減災ができる。今回でも地震があつて、津波が来ました、道がすぐに渋滞になって逃げられませんでした。この教訓を得るとすれば、先ず小高いところに4車線の道を一本ぽんと作っておく。その場合、地震が来たら絶対に下ってくるなど、その瞬間に4車線の上行きの道路

ができる。あるいは逃げられない方に対してはそれ以上の高い所に行けるような建物を建てておくとかですね、そういう発想をすれば良いんですけど、日本っていうのはなぜか国民の、庶民の賢さと一番政府トップの馬鹿さどがなぜこんな対比的なことになるんだろうかって、時々考えるんです。一応少し解答を持っているんですが、そういうことが日本っていうのは不思議な国なんだなと思っていますけど、でもそうは言いながらもそれがトップから変えなくちゃ行けないかと言うと、庶民の賢い智恵の積み重ねの方が国の改造には良いのかなってふと思うときがあります。ちょっと喋りすぎましたが、石川さんの意見を聞いて、60以降の人間が温泉地に行こうというのは大賛成ですので、皆様も、それに近い、以上の歳の方に是非奨励していただきたいと思います。

前田：一つ違う視点から意見を述べさせていただきます、皆様にご感想を伺いたいと思います。

私は実は東日本からの復興ということを考えていくときに、こういう視点が必要なんだと思っています。東北は全国あるいは世界の多くの観光客を受け入れる土地であるということは間違いのない事実ですけれど、それを復活することだけが東北の観光復興じゃないんです。そうではなくて、東北自身が日本の観光のいわゆる送り出しの土地であるという自覚を持つ必要がある。つまり東北の方たちが先ず近くの東北へ旅行するということの重要性を矢張り考えなきゃいけないんじゃないかと私は思うんですね。「いや、それどころではない」という御批判があるのは分かります。私は、このことが私のある面で言うと、専門に近いところの問題なのですが、こういうことを言います。現在東北に限らないんですが、日本の観光と言っても良いのですが、特に今日は東北に絞ります。東北の観光、復興・活性化という大きな鍵を握っているのは何なのかということの一つ絞り込んでいく

と、それは各地方自治体の教育委員会なんです。教育委員会の姿勢、そのものが鍵なんです。それは何かと言うと、実は私達の気持ちの反映でもあるんです。今日本に蔓延しているのは何かと言うと、責任は取りたくない、無難が第一、追求されたら困るっていうことは徹底的に避けるっていうことなんです。そういうことで、それに逆らって頑張っている人というのは東京のリーダーなんです。石原知事だけなんです。石原知事、急に人気が出ているのは、例の宮古の瓦礫を持ってきたときの、バンバン東京都に抗議の電話やメールが来たときに、一言、黙れと、それは我々はお出鱈目やっているんじゃないぞと、国が決めた手順や手続に全部沿ってやっているので、感覚的に感情的に無用な恐怖を持ったようなことで対応したら何もできないではないかってことを言ったんです。しかし、実際は御存知の通り、京都の、大きな京都でもですよ、陸前高田の木を、薪を燃やすことができなくなったのは何かと言うと、矢張り不安を持っている一般国民の、そういう大丈夫なの、大丈夫なの、何かあったらどうするの、っていう風な言い方をされるのには弱いんですよ。科学者が当てにならないんだから、誰も絶対に大丈夫ですなんて言うことはできない訳です。だから、所定の手続を持っているものについてはOKだっということで前向き姿勢に行く。私と家内はいつでもそういう強気でボンボン言うんですけど、娘に言わせると、娘は小さな孫のことを思うとなんて言われると、こちらもちよっと腰が引ける。実際こういう例がありますね。最近になって東北、特に沿岸部にも沢山、修学旅行や研修旅行生が増えています、御存知の通りです。ところが全部それは私立です。公立学校はいません。それは公立学校の場合は何かあったらどうするのっていうようなことに最も弱い体質を持っている。そういう組織だからです。それがもう日本を要するにみんなもう無難指向、安全指向というものにどンドン

どンドン行く、そういう風に行ったときにそれを変えるものは何かっていうと、それは地域の人達です。だから大沼さん、蝦名さん、谷口さん、それぞれご発言のあるような方達が、例えば青森や宮城やそういうところの方達が、生徒さんたちがどこかに出かけるっていうときに、それは大いに行くべきだっていう応援の立場に立つか、行って大丈夫かっていう姿勢を示すかってことはまったく違う問題なんですね。今、日本の場合で言ったら、それはもう圧倒的に、安全第一で、危ない物は止めましょう、それがもう世界中に広がっていますから、外国人観光客が来るのは私の見込みでは最低でも後5年は無理なんです。それはもう日本人は放射能のこと知らないからですけど、ヨーロッパは実はチェルノブイリの時の問題がすごく大変なんです。それで今ちょっと困っちゃうのは、先ほど浜田さんが仰っていた世田谷、あれは全然そうじゃない、不法投棄されていたものをボランティアな個人的な、それ以上いうと失礼ですけど、マニアックな方が放射線量を探していく訳ですね。それと本当のホットスポットとが区別が付かないんですよ、我々には。本当のホットスポットっていうのは私はたくさんあるって見ているんです。あの、土手の下とか、ええ、高い所に遮られてそこに集まった物がどこかに集まるのをホットスポットと言うので、距離ではないんです。地形なんです。ご免なさい、話が少し飛びました。そんなことの時に、是非所定の手続で大丈夫だっていうものに対しては、地域の子弟の方達、お子さんの研修旅行や何かにはですね、東北の他の地区へ行くっていうことを是非市民として応援していただく、これが結果的に言うと、日本全体の観光振興にとって大きいんじゃないかという風に考えておりますけど、何か御意見がありましたら、是非お聞かせ下さい。

浜田：多分教育が一番問題だっていうことは私もその通りだと思っておりまして、それ議

論し出すと全然こんな時間では収まらないんで、実は触れなかったんですけど、そうですね、各人の心の持ちようの中に責任を取らないというシステムが一番悪い。私も実際に建設省の委員会とかに出ていますと、結局どの委員会もそうですけど、責任を取らないためにやっているようなものです。前の薬害エイズ問題で帝京大学の安部副学長さんがおられましたけれど、あの方は「僕は意見を出しただけだ」と、それを採用したのは役人であると、役人の方は、「いや、安部副学長の意見に従ってやりました」と。どこに責任があるのだろう。で、これ責任を取らせる方法ないんだらうかって考えるんですけど、一瞬だけ脱線させてください。そうでなかった時代はないわけでもない。例えばその鎌倉武士が会議をするときに、八幡大菩薩に願を掛けてそれに誓詞を書いて、それを焼いて飲むと、この会議の間は俺は自己の利害とか、自分たちの私益を忘れてやるんだ、というような心構えで臨んだから、恐らく鎌倉幕府というのはある意味では善政が敷けたというふうに思っているんですけど。そういう気概を持った日本人を作るには、もう一回どうしたら良いんだらうかと、私全然これに答えも何もないのですけれど。そうでなかったら、結局個人個人の自立と気概というものに頼らざるを得ないのだから、それを作り直すということは相当難しいけど。結局その教育に戻ららうというのが私ちょっとこれ温泉とは離れた議論ですけども。そういう意味でどうでしょう、今回の何か体験、経験を経て、そういう何か気持を持ったような若者が出てくる可能性ってあるでしょうか。

蝦名：浅虫温泉に北海道から修学旅行で来てたんですね。で、浅虫温泉では体験ねぶたというのをやって生徒さん達も喜ばれていたんですが、地震が発生したら、危ないって全部、北海道でやるようになってる。ガタガタになってしまっ。それから太平洋の魚はお膳に出さないでくださいって、どうしよう

もないっすよね。風評被害って言うんですか。そういうのを少し静めてくれる誰かがいないものかなと考えているんですけど。

浜田：本当は日本海へのロシアの不法投棄の方が怖いかもしれないんですけどね。

会場：質問です。教えていただきたいと思います。

最初に大沼様に仰いましたことですが、今回の震災を機に3.11の前にもう戻ることはできないという、その戻ることはできないということは、何をどんな状況を指して仰っているのか一つ教えていただきたい。もう一つは浜田先生の仰った、ちょうど仙台空港が何となく同じ観点から仰っているような気がしたんですね。元に戻すと言うことではなくて、例えばの話ですね、新しい機能を付け加えたもの変わっていくと、そういう発想が今回の震災を機に必要なではないか。温泉地としてということの一つの例として、これはちょっと聞き間違いかもしれないのですが、癒しというような言葉が出てきました。その時に癒しという言葉はこれはもう従来から温泉地は癒しの場と言うことで、例えば若い女性が温泉地に行く、癒し、癒しという言葉が非常に一時期流行したという風なこともあり、観光地も含めて癒しというようなことが言われている。まあ、これ一つの例だと思うのですが、各温泉地で御活動、御苦労もなさっている諸先生方が新たな機能に向かっての今後の温泉地のあり方として、非常に難しい課題かなと思うんですけど、お考えというものがあれば、これは非常に新しいことをやっていくときに共通してくる要素ではないかと思われまから、お教えいただけたらと思います。

大沼：有り難うございます。あくまでも私が宿屋をやってきたの、取りあえず心情的な部分で先ほどお話ししたんですけど。結局ですね、いつも宿屋業やっていて結構苦しいなってすごく思っているところがあって、最近ですとネット評価とかいろいろ出てきて、

あれは絶対主観ではあるんですけど、ある程度指標にはなるなと思っっているんですが、結局そのエージェントの点数のためにやっている。なにか本当に根本的に結局は何のために宿屋やっているのかというのがありまして、それで3.11で変な意味ですけど、ある意味解放されたということですかね、私も諦めちゃった感じなんですよ。何やってももう駄目だろうと、ある意味世界が壊れたくらいの衝撃でしたから。そういう社会から一時解放されたっていう感覚がありました。聞くところによると、首都圏のサラリーマンの多くの方が天変地異を期待しているって話があるんです。これはもうこのシステムっていうのを変えられないんで、それこそ天変地異でも起きない限り変わらないって思っているらしいんですけど。ある意味私もちょっとそういうところがあったかもしれませんが、ああいう破壊的なことがあって一種一寸解放されたっていうところがありました。生産と消費の繰り返しをずっとやってきているわけですし、高度成長とかバブル期を経てですね、温泉地、湯治場も消費の対象としてなっている中で、どちらかという生産の方が大変ですよ。人間の時間を考えると、生産する時間とか、努力の方がすごく上回っていて、これだけ物が沢山溢れていて世界中どこにもないものが、全て揃っているような国であるけれども、何かこの幸せ感がない、ものに囲まれているにも関わらず、幸せ感がないというのに非常に違和感を感じております。消費大国ではあるんですけど、消費しても全然その幸せ感がない中で、宿とか温泉もその消費の対象となっている。でも本当は、今回一番気付いたのは、自然からの恵みを我々は皆様のお役に立てる、立てているというような状況をなおさら感じたわけでありまして。自分の持ち物というよりか地球のものをお借りして、生きているような感覚がありました。もう一回そういった何か消費するというより、養う、生まれてくるような逆なべ

クトルのようなものにできないかなど、これはこちらの学会さんの方でも常に温泉活用とかの部分でも出てくることだと思うんですけど、本当の意味での心身を再生する総合的な場として、どのように持って行くかというところが、どうも消費という概念、まあ点数を付けられて終わりというような概念とは違うような違和感をずっと感じておりました。ある意味ちょっと破壊されてしまった中で、またその世界に戻るのには本当に苦しいなと思っていて、何かもうちょっと違う方向を自分なりに作ってから、ネットエージェントに戻るにしても、普通のこの消費社会に戻るにしても、戻りたいなというのがあります。とにかく、個というものを個の旅館というか、そういったものを磨き上げる覚悟をするために、ずっとやってきたわけなんですけど、今回何千人単位で被災者を受け入れた時に場の効用と言いますか、石川先生も仰っているんですけども、湯治場というか温泉地というか、その場がすごい影響するんですよ。でするので、どういった場を作っていくのか、浜田先生が仰ったネットワーク化というのが尤も至極な点なんですけど、じゃそのネットワーク化をする以前にどういう場が作られているのか、そこのお宿と温泉を中心に、その場がどういう場になっているのかという部分を確立しないで、お手々繋ぎましようみたいなネットワークづくりをしても、真の癒しというか安らぎというか、心と体の再生に結びつく場がない限りは、どんなネットワークを作っても意味がないのです。そういう意味では私共も結局宿を離れて、9年ほど地域づくりをやってきているんです。結局、場作りをやってきているんですけど、矢張り3年前も山がなくなっちゃう地震があったりとか、今回もこんな地震があったりとかで、いろんなことがありすぎて、モチベーションも下がる一方なんですけれども、諦めないでやっていくしかないなと思っています。お答えになっているかどうか分かりませんが、心情

的な部分が大きいと思います。

浜田：おそらく私の答えも少し被るんですけど、ちょっと補助線を引いてみますとね、昔イザヤ・ベンダサンが、日本人というのは社会にいろんな問題が出てきて、その矛盾が解決できずにそれが極限まで達するとまるで天秤が一回転したかのように重りをふり除けてしまって新しく始めると。これを心機一転って言うのだと意地の悪いことを言いましたけど。恐らくサラリーマンが天変地異を望んでいるというのは、そういうそのいろんな矛盾みたいなものを感じつつ、それを解決する方策が見えない、だからいきなり破断点に来てしまって、バンといきなり壊された方が新しく心機一転できるだというそういう期待感じゃなからうかと私思うのですが。さっき言った仙台港の話をも具体的にしますと、仮に超近代的な港ができましたと、そう言ったときに何が起きるかというほとんどコンピューター管理なんですね。この船がこの荷物を積んで、こういう時期にこういう気象で入ってくる。だから準備をこういう風にして最も効率的に経済的にと必ずなります。それがやっている人間にとって気持の良いことかかっていうと、経済的には確かに一番良いことなのでしょうけど、それはかなり心理的なストレスにはなるんだろうと。そういう風にして仙台港を作り、仙台の町づくりをしていった場合に、かなりストレス社会になるだろうということは読めてくる。そうすると、それからの体制が問題になります。その時には別の場としての温泉が役に立つのではないかと考えている次第です。

さて、東北の被災地の復興はこうすべきだという確実な結論は出てこなかったかもしれませんが、パネリストの方々の経験と知識から実際に起きたこと、こうすれば良かったと思っていることは多少なりともお聞きになることができたかと思えます。

活用されなかった湯治場、行政と現場の不一致、安全第一主義の弊害、風評被害、負の



スパイラル、温泉地の防災管理、放射能の知識の欠如、天変地異を望むサラリーマン、身の上を語る被災者の心理、等々幾つもの問題が錯綜して出て参りました。その問題が存在することを認識することが問題解決の第一歩でもありますので、このシンポジウムが今後も皆様と一緒にこれらの問題を考えていくきっかけになれば幸いです。

どうも拙い司会でしたが、積極的な御参加どうも有り難うございました。

## 書評①

小関信行／アンゲラ・シュー著：  
『クアオルト・Kurort入門 気候療法・気候性地形療法入門』  
～ドイツから学ぶ温泉地再生のまちづくり～

書肆犀 158頁 2012年1月

定価 1,000円(税別)

日本温泉地域学会の小関信行会員とミュンヘン大学アンゲラ・シュー教授の共著『クアオルト・Kurort入門 気候療法・気候性地形療法入門～ドイツから学ぶ温泉地再生のまちづくり～』が刊行された。著書のタイトルとしてはめずらしく長いが、著者にとっては読者に本書の内容を一目瞭然に示しかつたのかも知れない。本書はドイツのクアオルト(健康保養地)の実態を克明に調査し、長期滞在型の温泉地域づくりの意義を多面的に把握、考察しており、今後の日本の温泉地のあり方を検討するに際して参考となろう。

著者の小関氏は東北芸術工科大学大学院博士課程での論文作成において、近年のドイツの気候医学的視点を取り入れた温泉保養地づくりを研究し、その応用例として山形県上山温泉の動向も加えて考察しているが、本書にはその要点がまとめられている。本書の構成は、パートIクアオルト入門～ドイツから学ぶ100年のまちづくり～、II医学的気候学/気候療法・気候性地形療法入門～気候療法と最新ドイツ式治療ウォーキング～、III気候性地形療法コースの鑑定(山形県上山市の例)～アジアと日本で初の気候性地形療法コースの鑑定～、IVクアオルトへの取り組み事例、V日本型温泉クアオルトである(II・IIIはシュー教授執筆)。

まず、ドイツのクアオルトの定義、分類にはじまって、医学、医療、保険、認定、環境、景観、催し、運営などを総合的に解説し、温泉地を構成する施設として、テルメ(温泉施設)、クアミッテルハウス(温泉治療

館)、クアハウス(温泉保養館)、クアパーク(温泉公園)、トリンクハレ(飲泉施設)などの各施設内容を紹介している。100年ほど前の石油掘削で温泉が湧出し、旧市街はずれの農地が温泉地として発展したバート・クロチンゲンについて、各種の温泉施設が広大な土地に計画的に配置され、旧市街と新興温泉地域とが見事に地域区分されている地図を掲載している。また、1978年に新たにクアオルトに認定されたライン川沿岸のバート・ゼッキンゲンは、市当局の長期計画の下に中世からある療養泉を核にして町全体の環境、景観、都市計画事業を展開し、計画を絶えず見直しつつ現在のすぐれた街の景観、生活環境の質の高さ、産業振興、優良な観光地形成に大きく貢献したことが述べられている。

ドイツで研究指導を仰いだ医学的気候学のシュー教授によるガルミッシュ・パルテンキルヘンなどでの実証的研究を踏まえた論考は、クアオルトの具体的内容とその効果を検証し、さらに上山市での展開に言及している。

本書では、最近のドイツのクアオルトの紹介に留まらず、その内容を日本温泉地の再生に活かそうとの視点から貴重な提言がなされており、すでに日本の上山温泉と由布院温泉では具体的な実験が始まっている。国民保養温泉地の活性化にとっても貴重な文献である。本書はB6判のコンパクトな体裁であり、図表の文字が小さくて読みづらい点も見られるが、16頁ものカラーページがあり、興味が湧く。会員諸氏に広く推薦したい。(山村順次)

## 書評②

## 山村順次著：『温泉地調査報告集（1）（2）』

城西国際大学観光学部観光地理学研究室（1）347頁 2011年3月

（2）262頁 2012年1月

頒価 各1,000円(送料込)

山村順次著『温泉地調査報告集（1）（2）』が、城西国際大学観光学部観光地理学研究室から発行された。2冊とも著者が40数年におよぶ温泉地研究の中で、機関誌や雑誌などに発表したものを集大成したものである。すでに、同様の手法で千葉大学大学院自然科学研究科から『温泉地研究論文集』（2005年）が発行されているが、同書は学会誌を中心に大学紀要などに掲載された学術的成果を整理したものである。これに対して、本書は機関誌や雑誌などで発表した業界や一般向けの内容をまとめたものであり、気軽に読める点が最大の特色となっている。

著者は、これまでの温泉地研究生活の中で、日本における温泉地の形成・発展・課題・あり方などについて、実地調査を踏まえた実証的研究を進めており、こうした姿勢が全編にわたって貫かれている。結論としては、温泉資源性や温泉観光市場性に加え、温泉地に居住している地域住民の姿勢こそが温泉地の方向性を示してきたとしている。

『温泉地調査報告集（1）』は、日本温泉協会の機関誌である「温泉」に掲載した報告をまとめている。主な内容は、日本の温泉地の地域的展開、日本の温泉地の諸相、温泉地アンケート調査結果、世界の温泉地、国民保養温泉地である。取り上げた温泉地は、いずれも現地調査に基づく実証的な研究に特色があり、長期連載で読者の支持を集めた力作と言えよう。特に、今後の日本の温泉地にとって大きな役割を果たす必要のある国民保養温泉地については、その約3分の1を超える36の温泉地が取り上げられており、貴重な成果

である。

『温泉地調査報告集（2）』は、雑誌「温泉」以外の機関誌などに掲載されたものと、別府市で行われた温泉シンポジウムの発言内容が収められている。特にシンポジウムは、その場限りのレポートが多く、その後、日の目は見ないが、今回こうした形で公開され、その意義は非常に大きいと思われる。

以下に、2冊の著書発行の意義を整理してみよう。

- ①機関誌や雑誌などに掲載された文章は、一般的には散逸されるが、今回、著者の努力で集大成され、その出版の意義は大きい。
- ②本書全体にわたって、現地調査を駆使した実証研究がバックボーンとなっており、分かりやすい内容となっている。
- ③一般の普及書に比べて、図表・写真が多いので、理解し易い。
- ④地域の理解、地域の活性化という観点で本書全体が構成されている。
- ⑤実態分析だけでなく、温泉地の課題とあり方などを具体的に指摘し、真摯な研究姿勢が随所に読み取れる。

温泉地の学習をする学部学生、温泉地の研究をする院生、そして教育者・研究者、さらには行政職に至るまで、幅広く本書を推薦したいと思う。日本の大学では、温泉と温泉地について体系的に学ぶ機会は少ない。そうした上からも、本書の発行の意義は大きいと言えよう。なお、本書は、城西国際大学観光学部山村研究室で各1,000円（送料込）で頒布されている。

（浦 達雄）

## 温泉地情報①

### どこまでやれるか！省エネでコスト削減－花山温泉・薬師の湯－

西口正敏（花山温泉・薬師の湯）

#### 1 はじめに

花山温泉は、和歌山市街地東部にある一軒宿である。起源は平安時代初期の西暦 803 年で、歴代天皇が熊野行幸の折に入浴のため立ち寄ったと言われている。1965 年に当時の社長が地質調査とボーリング調査を行い、501 m の所で突然炭酸ガスの圧力で温泉が自噴した。泉温 25.5℃、pH 6.4、泉質は含二酸化炭素・鉄・カルシウム・マグネシウム・塩化物・炭酸水素塩泉、含有成分（蒸発残留物）総計は 23.353g/kg の高張性（成分の濃い）温泉であった。宿の開業は 3 年後の 1968 年である。湧出時には無色透明であった温泉は、空気に触れて黄褐色に変化し結晶化して、浴槽やパイプ、側溝を詰まらせた。花山温泉は温泉スケールの堆積量が多く、堆積スピードが非常に速い。放置すると半年以内に全ての配管や排水側溝、温泉の源泉井戸が温泉スケールで詰まる。そのため、工事は業者に頼らず自力でメンテナンスを行っている。メンテナンスは施設全体に及び、社長とマネジャーの西口が色々と試しつつ常に改善を行っており、「リアルな実験現場」とも言える温泉施設である。

#### 2 エコと省エネ

温泉施設にボイラーは欠かせない。湧出温度が高く、カランやシャワーで使用する湯は、温泉ではなく普通の水をボイラーで沸かす場合が多い。サウナの熱源もボイラーから取っており、重油やガスの価格上昇のため、施設の運営が厳しくなっている。そこで、エコと省エネの観点から、重油、水道、電気、ガスをどこまで削減できるかがポイントになる。

①水道水の節約：水道水の使用量を抑えるためには、井戸を掘る事であるが、土地柄、地下水の出が悪い所もある。花山では井戸が 2 本あるが、期待するほど水が出ない、そこで、雑用水を使用し、屋根に落ちた雨水を溜めてる過し、浴場洗浄などに使用している。

②ボイラーの小型化：ボイラー熱源について、業者に任せると忙繁日を 100 とすると 120 の能力のボイラーを設置することが一般的である、温浴施設は忙繁日と閑散日の差が大きく、日曜日 100 に対し月曜日 20 の事も良くある。ボイラーの運転と停止を繰り返すと、無駄な燃料を消費する。当館では現在、IHI の KM300 の還流ボイラー 2 機を使用し、暇な時や夏期には 1 機のみを運転している。設置時に業者から「大丈夫なのか？」と聞かれたほど小さなボイラーで、以前の KL1600 と 750 の 2 機は、現在 300 × 2 機である。以前に比べ、本当に小さなボイラーを使っている。小さなボイラー 1 機又は 2 機で営業できるのは、全ての給排水のラインや湯の沸かし方を変更した結果である。

③太陽熱と排水熱の利用：ここで湯の沸かし方の変更を示す。まず、給水温度を上げるためにシャワーやカランの排水熱を利用した。排水熱交換機を設置し、最高で給水温度を +20 度まで上げることができる。これは忙繁日ほど効率がアップする。さらに、太陽熱温水器を設置し、夏場には最高 65℃位まで水温を上げる事ができた。排水熱交換で上昇した水を太陽熱交換に入れれば、水温はさらに上昇する。ボイラー給水については、蒸気が液体化したドレンをボイラー給水タンクに回収する事で水温を上昇させ、ボイラーの負担を減らす。蒸気が液体（湯）に戻る際の熱を

回収し、熱と水をリサイクルすることでボイラー効率を上げるワケである。その他、エコノマイザー、パワーマイザーという排熱利用で湯を沸かす方法があるが、設備コストがかかり、専門技術が必要となる。

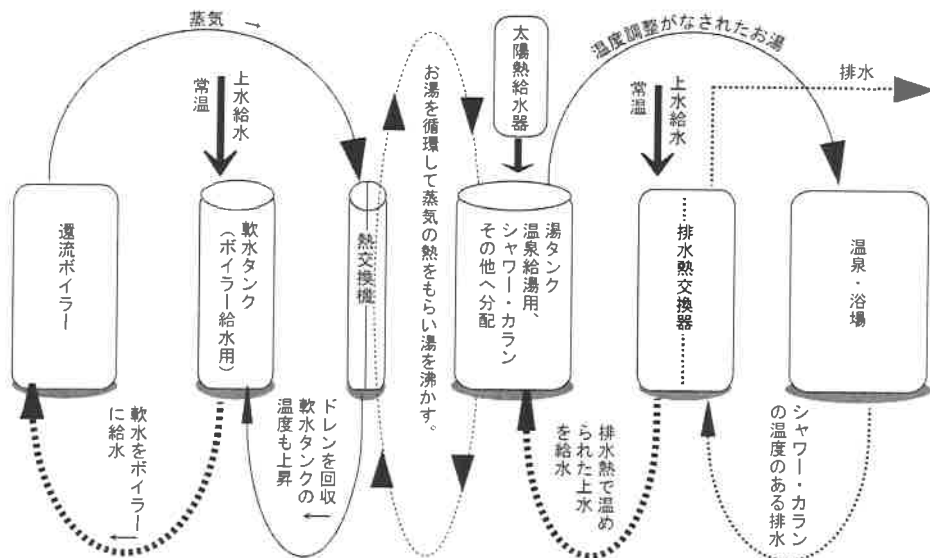
④熱交換器の利用：タンクの湯の沸かし方も変更した。以前はタンクに生蒸気を入れて湯を沸かしていた。これは最も早く湯を沸かす方法であるが、ロスが多くタンクに負担をかける。蒸気を直接噴射するため、ドレン回収が出来ない熱源が垂れ流され、蒸気の振動でタンクに亀裂が生じて水漏れが発生する。熱ヒビの入ったステンレスタンクは修復が難しく、耐用年数が短くなる。そこで、蒸気の熱を間接的に受け取れる熱交換器を採用した。そのため、設備にかかる負担が減り、蒸気ドレンの熱回収が可能になり、ボイラーへの負担が軽減した。タンクは、No.1、No.2、No.3と順番に温度を上げ、一つのタンクを出来る限り大きなタンクにする。大きなタンクは給水されても温度の変化が少なく安定する。こうした工夫により、小さなボイラーで効率よく温泉運営が出来るようになった。

⑤節電：今や節電に取り組んでいる施設も多

い。花山温泉でも10年以上も前から実行してきた。打たせ湯や水風呂などの温泉でない循環浴槽の循環ポンプにインバーターを設置してモーターの回転数を調整し、ろ過能力や水風呂のチラー温度（水の温度を下げるクーラー）を、客数や季節で効率よく調整し、節電につなげた。浴場内の全ての電球を蛍光灯に交換、常時点灯の場所はLEDに変更、電気契約の見直しをするなど、やるべき事は多い。

### 3 まとめ

花山温泉の薬師の湯の熱エネルギー循環をまとめると、図1のようになる。常に新しい発想と工夫で運営をしているが、小さなエネルギーで施設を運営するには、細かなセッティングが必要である。プラントが出来たあとにも蒸気や水の圧力、インバーターの電圧など細かな調整が不可欠である。それができないと発想と工夫が台無しになり、営業ができない事態になる。花山温泉では、社長と私、毎日の風呂沸かしの当直さんら皆で意見を出し合い、どこまでできるのか、エコと省エネを楽しみながら工夫を続けている。



花山温泉ボイラー室の熱エネルギー循環図 (2010)

## 温泉地情報②

### アーヘン温泉訪問記

赤池勇治 (静岡県庁)

#### 1 はじめに

ドイツ西部、オランダ・ベルギーと国境を接する人口 25 万人のアーヘン温泉 (Aachen) は、日本企業も多く進出しているデュッセルドルフから電車で西に約 1.5 時間のところにある。ここは、フランク王国のカール大帝 (シャルルマーニュ) が 9 世紀初頭に建設し、ドイツで初めて世界遺産に登録されたアーヘン大聖堂は有名である。



アーヘン大聖堂

アーヘンには、年間 40 万人が訪れる温泉施設「カロルス・テルメン (Carolus Thermen)」があり (カロルスはラテン語で「カール」の意)、その最高責任者兼アーヘン観光協会役員のヴェルナー・シュレッサー氏に、アーヘンの温泉についてお話を伺った。

#### 2 温泉町としての歴史

温泉はアーヘンが「町」として始まった契機をなす。市の中心部に源泉があり、その周りに人々が住み始めた。ローマ時代からの町であり、2000 年の歴史を誇る。

アーヘンの温泉水は 1 リットル中 3.5～4.5g のミネラル分を含み、「フッ素、ナトリウム塩化物、炭酸水素を含む硫黄泉」が公式な泉質である。18 世紀頃は、これを 1 日 12



市中心部にある源泉にて

リットルも飲んでいた。“この温泉を飲めば体内がきれいになり、もし体内に毒を持っていたら、それが外に排出され、また、肌にも良い”と言われていた。現在はリウマチや関節炎に効果があることが知られている。

アーヘンの最盛期には 30 以上の温泉治療館があったが、第 2 次大戦後、町の中心部では駐車スペースの確保が困難となり、その数は減少傾向にある。硫黄泉は設備を傷めやすいため、特別な機器が必要である。それは高くつき、技術的にも難しい。廃業した治療館では、利用者から硫黄の匂いについて苦情が来ることも良くあった。

#### 3 温泉施設「カロルス・テルメン」

この温泉施設は 2001 年に開業した。アーヘン市が建物を所有し、運営は第 3 セクターが行っている。メインに 18 本の柱に囲まれた大温泉プールがあるほか、入浴ゾーンは、ジャグジーや洞窟風呂、2 つの屋外プールなど、水温も 18～38 度に設定された 10 のプールからなる。サウナゾーンにはフィンランド式サウナ、ハمام、ローマ風微温浴室や屋上のサウナガーデンなどが充実している。また、レストランなど 3 つの飲食ゾーン、マッサージエリア、会議スペースを併設し、850 の更



大温泉プール  
(カロルス・テルメン提供)

衣ロッカーを備えている。

カロルス・テルメンは、フィルターにかけた温泉水を1時間で1万リットル供給し、施設内の温泉水は15時間で完全に入れ替える。温泉が硫黄泉なので、6歳未満の子供は入場させていない。6歳から15歳までは大人同伴で認めている。地域住民、子供、高齢者、兵士、障害者、誰に対しても一切のディスカウントはない（ただし夏期割引制度はある）。ここは「温泉プールのみ」、「温泉プール+サウナ」など6種類の料金体系があり、利用客の3分の2は温泉プールのみ利用である（2.5時間）。他の施設に比べて高額であるが（温泉プールのみ利用で2.5時間11ユーロ、サウナ付き22ユーロ）、建設に4,000万ユーロかけているので稼ぐ必要がある。レストランや他のサービス業も含め、年間700万ユーロの収入がある。

半官半民の会社で運営するこの施設は、サービスの質がNo.1だと自負しており、清潔さ、静けさを重視している。民間会社であれば、低コストでの運営はできるが、質が伴わないこともある。冬場は客が多いが夏場は少ない。冬は天気が悪いので、雨や雪が降ると人々は温泉に来る。夏、天気が良いとサイクリング、セーリング、スイミングなどを楽しむ。訪問当日は850人の来客があったが、年間の1日平均は1,100人である。この日の最高気温は21度なので、21%の割引が受けられる。このサービスは7・8月のみ適用される。

マッサージなど東洋のものが取り入れられている1つの理由は、ドイツ人が旅行好きであることである。例えばバリ島に旅行へ行き、マッサージを受ける。ドイツに帰ってくると「ここで同じマッサージを受けられる？」となる。トルコのハمامも同様であり、食べ物も同じである。ドイツ人は国際的な思考の持ち主で、ビジネス、プライベートでも世界中を旅し、ドイツに帰ってくると、同じものを欲しいと言う。

#### 4 観光振興における温泉の位置づけ：健康づくりと治療の明確な区別

アーヘンの観光マーケティングの重要性では、まず大聖堂の訪問とショッピングが主目的であり、温泉は6～7番目である。温泉はアーヘンの誇りではあるが、それほど重要ではない。歴史の一部であるため、観光客にも温泉のことは話をする。バーデンヴァイラーのような小さな温泉町では、訪問目的の第1は温泉である。アーヘンの温泉ツーリズム、ウェルネスツーリズムは、全体の約10%であり、責任者の仕事の主目的は、コンベンションを誘致することである。

アーヘンは健康づくりと温泉治療を明確に分けて考えている。カロルス・テルメンは楽しい健康づくりを提供するが、利用者は料金を支払う。一方、温泉治療は健康保険から支払われる。ドイツの温泉施設には、両方を組み込んだ中間形態の施設が良く見られるが、マーケティングの観点からも良くないと考える。まず、運営は大人向けに限定することが重要である。多目的では軸がぶれて売りたいものが不明瞭になる。保険でカバーできるのは重篤な治療・病気のみである。例えば、人工股関節の手術を受けた患者は病院に6日滞在、その後、温泉リハビリ病院に3週間滞在、その後はカロルス・テルメンへ通う。リハビリ病院での3週間滞在は楽しい健康づくりのためのものではなく、深刻な治療であり、保険から費用が支払われる。

## 学会記事

### ●日本温泉地域学会第19回研究発表大会・総会

平成24年6月3日(日)・4日(月)の両日、日本温泉地域学会第19回研究発表大会・総会を長野県長野市松代温泉で開催いたします。多くの会員の参加を期待します。なお今大会では総会があります。「温泉地域研究」第18号の同封葉書に出欠を記入し、欠席者は委任欄に捺印の上返信してください。また、今回のエクスカージョンは2コースが用意されていますので、ご注意下さい。

### 日本温泉地域学会第19回研究発表大会・総会スケジュール

#### 第1部 視察会・研究発表大会・シンポジウム

開催温泉地：長野県長野市松代温泉

開催日：平成24年6月3日(日)～4日(月)

発表会場：松代温泉国民宿舎松代荘 TEL.026-278-2596

宿泊施設：松代温泉国民宿舎松代荘 TEL.026-278-2596

懇親会場：同上

視察会集合：①戸隠神社・戸倉上山田コース(昼食代実費)：6月3日(日)10:30 JR長野駅  
②川中島・戸倉上山田・松代コース：6月3日(日)13:00 JR長野駅

受付：6月3日(日)17:30～松代荘

6月4日(月)8:30～松代荘

参加費：一般会員・賛助会員2,000円、学生会員1,000円

懇親会費：5,000円(学生3,000円)。学会指定宿泊施設を利用する場合、懇親会費は宿泊費に含まれます。

宿泊費：学会指定宿泊施設を利用する場合、懇親会費・朝食込みの1部屋2名利用で1人当たり料金は1万2,000円です。

交通案内：新幹線長野駅下車。路線バス：長野駅善光寺口3番、松代行で松代駅下車です。エクスカージョン②の参加者は、新宿西口京王バス乗場より8:50発～長野駅12:32着、または9:50発～川中島古戦場13:19着下車の高速バス(川中島バス)もあります(往復7,200円で格安)。

研究発表大会・エクスカージョンに参加される会員は、下記の参加形態によって郵便振替で学会事務局宛に相当金額を5月20日(必着)までに前納してください。振込によって大会参加申し込みとします。

また、平成24年度年会費(賛助会員：3万円、一般会員：4,000円、学生会員2,000円)も次の金額にプラスして送金してください(前年度までの滞納がある方はその金額も加えてください)。なお、研究発表大会不参加の会員も平成24年度年会費の送金をお願いいたします。

学会指定宿泊施設+学会参加：12,000 + 2,000 = 14,000円(学生：13,000円)

懇親会参加+学会参加：5,000 + 2,000 = 7,000円(学生：4,000円)

視察会・学会参加のみ：2,000円(学生：1,000円)

郵便振替口座番号：00190-6-462149 加入者名：日本温泉地域学会



## 日程

6月3日(日) 視察会①コース 10:30～17:30 JR長野駅集合

②コース 13:00～17:30 JR長野駅集合

①コース: JR長野駅～戸隠神社(中社・奥社の杉並木)～戸隠神告げ温泉(蕎麦昼食・温泉に入浴または大日方で蕎麦打ち体験)～信濃町道の駅～戸倉上山田温泉(歓楽温泉地から新たな取り組みで復活を図っている実態を視察)～松代温泉

②コース: JR長野駅～川中島古戦場～戸倉上山田温泉(歓楽温泉地から新たな取り組みで復活を図っている実態を視察)～松代(象山神社・大本営跡・松代城・宝物館・文武学校・松代温泉源泉見学:大本営跡では地元高校生ボランティアガイド、その他は地域ボランティアガイドが対応)

17:30 会場の松代荘で宿泊・懇親会の受付 2名1室:12,000円

18:30 懇親会開会 懇親会のみ参加:5,000円  
大門おどり披露。

20:30 “湯めぐりナイトツアー”(大室温泉まきばの湯)

6月4日(月) 研究発表大会・総会(松代荘)

8:30 受付

9:00～11:20 研究発表

11:20～12:30 昼休み(理事会)

12:30～13:00 総会

13:00～13:30 基調講演

13:30～15:00 シンポジウム

## 研究発表大会プログラム

6月4日(月)

自由論題 発表時間:20分(発表15分、質疑5分)

座長:浦 達雄(大阪観光大)

9:00～9:20 鈴木 晶(別府大短大):別府温泉における国際観光の考察

9:20～9:40 内田 彩(大阪観光大):江戸時代の温泉地における「食」の考察

9:40～10:00 西村りえ(温泉ライター):日本統治時代の面影の残る台湾の温泉

10:00～10:20 休憩

座長:新田時也(東海大)

10:20～10:40 長島秀行(東京理科大)・浜田眞之(国際温泉研究院)・甘露寺泰雄(中央温泉研究所):温泉水の簡易測定(その4)ー静岡県熱川温泉の自噴温泉群ー

10:40～11:00 石川理夫(温泉評論家):温泉利用の公衆浴場数日本一を誇る長野県にみる共同湯を含めた現況

11:00～11:20 甘露寺泰雄(中央温泉研究所):忘れ去られた温泉(鉱泉)ー東京都内および近郊の小河内鉱泉・網代鉱泉・森ヶ崎鉱泉・綱島鉱泉ー

11:20～12:30 昼休み(理事会)

## 総会

12:30～13:00

## 基調講演

13:00～13:30 飯島裕一（信濃毎日新聞社）：「生活の中で温泉を生かし、楽しむ」

## シンポジウム

13:30～15:00 地域特性を生かした温泉地域の活性化

コーディネーター：山村順次（城西国際大）

パネリスト：飯島裕一（信濃毎日新聞社）

：徳永昭行（長野市開発公社）

：寺澤豊治（松代ボランティアガイド）

- 日本温泉地域学会第18回研究発表大会は、平成23年11月5日（土）・6日（日）の両日、青森県青森市浅虫温泉で開催されました。さらに今回は、東日本大震災復興を願っての「東日本大震災復興支援シンポジウム&エクスカージョン」と題して温泉地研修を加え、研究発表会終了後に蔦温泉と東鳴子温泉に宿泊するエクスカージョンを実施しました。大会の参加者は32名であり、そのうち引き続き蔦温泉と東鳴子温泉に宿泊する第2コースにも参加した方は20名でした。

5日のエクスカージョンでは、谷口清和会員（本学会監事）の周到的準備のもと、地元の観光ボランティアの方々の案内で青森港の新しいウォーターフロント（八甲田丸・ねぶたミュージアム・特産品売り場・のつけ井体験など）を散策しました。参加者にとって有名なのつけ井の体験と青函連絡船として活躍した八甲田丸の見学は興味深かったようです。その後、浅虫温泉へ移動し、棟方志功の定宿であった椿館では、かつて訪問された明治天皇の関係資料なども見学できました。さらに、浅虫温泉の温泉資源を安定供給するために温泉集中管理を実施した経緯を案内していただきました。宿泊施設では「津軽じょんがら」の演奏があり、土曜日であったために多くの宿泊客がロビーに溢れました。

6日は自由論題の発表の後、午後から「東日本大震災復興支援シンポジウム」が開かれ、浜田眞之理事長の司会のもと本書のシンポジウム記事のように活発な討論が行われました。この中で、パネリストの東鳴子温泉大沼伸治氏の体験として、地震によって温泉源が涸れ、浴場の利用ができなくなって旅館経営の閉鎖を覚悟したが、翌朝には奇跡的に温泉が大浴場に溢れていて自然の驚異と恵みに感じ入ったとの話に、参加者一同感銘を受けました。

シンポジウム終了後、日本有数の黒湯で知られる「東北温泉」社長の沢田穰氏のご好意で、マイクロバスと入浴体験を提供していただきました。深謝いたします。

その後、八甲田山麓の秘湯の宿である蔦温泉へ移動、湯船の底から湧き出す温泉に浴し、会食の場は即大震災後の課題を話し合う場となりました。天与の温泉のありがたさを被災者にいかに継続して提供するかが重要ですが、その具体的策は我々学会員の一人ひとりの取り組みに関わっており、翌日の東鳴子温泉での会合でも、そのことが話し合われました。

日本温泉地域学会第18回研究発表大会は、本学会の社会的貢献のひとつとして「東日本大震災復興支援シンポジウム・エクスカージョン」を実施しましたが、今後とも学会開催温泉地の課題に直結したエクスカージョンやシンポジウムなどを実施していく所存です。会員の皆様のご支援をお願いいたします。

- 日本温泉地域学会・温泉観光士養成講座実行委員会主催の「温泉観光士養成講座 in 霧島」が、平成 24 年 2 月 9 日（木）～ 11 日（土）の 3 日間、霧島温泉郷で開催され、57 名の多くの参加者が真剣に受講し、野外実習は 2 班に分けて、霧島温泉郷の多様性を学びました。本学会のこの企画を受けて、霧島市当局・霧島観光協会の全面的なご支援のもとに講座が開かれることになり、特に地元の温泉関係者が多数参加されたことは、学会の社会貢献として有意義であったと再認識しました。今後とも全国の温泉地で継続していく所存です。今回の講座実施に際して、本学会理事で妙見温泉観光協会長の只野公康氏には多大のご尽力を賜り、厚く御礼を申し上げます。
- 学会誌「温泉地域研究」第 19 号（平成 24 年 9 月末刊行予定）の論文・研究ノート・書評・温泉地情報などの原稿を募集します。投稿規程に合わせ、学会誌「温泉地域研究」の冊子を参考にして原稿の送付をお願いいたします。なお、編集の都合で今後は学会事務局のメールアドレスへもワードで作成された投稿原稿の添付をお願いいたします。学会事務局への原稿締め切りは、8 月 15 日（水）必着とします。

秋の第 20 回研究発表大会の開催温泉地は、現段階で未定です。決定次第、学会ホームページ上に掲載し、またメールアドレスを登録されている会員にはメールでお知らせします。学会発表を希望される方は、8 月末日までに発表者名、所属、タイトル、発表内容（100 字程度）を葉書に書いて学会事務局へ申し込んでください。

# 日本温泉地域学会入会申込書

平成 年 月 日

会員種別	一般	学生	賛助 ( ) 口
ふりがな 氏 名	印 (満 歳) 男・女		
団体名・商号 代表者名	印		
勤務・所属先名称			
所在地	〒		
	電話	( )	
	FAX	( )	
	E-mail :		
現住所	〒		
	電話	( )	
	FAX	( )	
	E-mail :		
研究・関心分野			
メールでの対応	可能	不可能	
研究会誌送付先	勤務・所属先	現住所	

\* 学生会員は学生証の写しを同封してください。

事務局受付日： 年 月 日

申込書送付先

〒 299-2862 千葉県鴨川市太海 1717  
城西国際大学観光学部山村研究室内  
日本温泉地域学会事務局  
(yamamura@jiu.ac.jp)

電話：04 (7098) 2839

FAX：04 (7098) 2805

郵便振替：口座番号 00190-6-462149 加入者名：日本温泉地域学会

## 日本温泉地域学会役員

- 会 長 山村 順次 (城西国際大学)  
副 会 長 石川 理夫 (温泉評論家)  
理 事 長 濱田 眞之 (国際温泉研究院)  
常務理事 長島 秀行 (東京理科大学)  
" 辻内和七郎 (箱根温泉供給)  
理 事 池永 正人 (長崎国際大学) 市原 実 (元山梨県立大学)  
浦 達雄 (大阪観光大学) 甘露寺泰雄 (中央温泉研究所)  
菊地 莊悦 (東鳴子温泉まるみや) 首藤 勝次 (竹田市市長)  
只野 公康 (妙見温泉どさんこ) 中澤 敬 (草津町前町長)  
布山 裕一 (日本温泉協会) 古田 靖志 (下呂発温泉博物館)  
松崎 郁洋 (黒川温泉ふもと旅館) 森 繁哉 (東北芸術工科大学)  
八岩まどか (温泉評論家) 山田 等 (聖徳大学)  
由佐 悠紀 (京都大学名誉教授)  
監 事 中山 昭則 (別府大学) 谷口 清和 (温泉地活性化研究会)  
幹 事 新田 時也 (東海大学) 小堀 貴亮 (大阪観光大学)

任期：2009（平成21）年5月25日～2012（平成24）年春季大会

### 温泉地域研究 第18号

2012年3月31日発行

編集・発行者 日本温泉地域学会

〒299-2862 千葉県鴨川市太海1717  
城西国際大学観光学部山村研究室  
(yamamura@jiu.ac.jp)

電話 04 (7098) 2839

FAX 04 (7098) 2805

振替 00190-6-462149

名義 日本温泉地域学会

印刷所 株式会社 こくぼ

〒260-0843

千葉市中央区末広3-3-10

# Journal of Studies on Spa Region

No.18  
2012.3

## contents

### Articles

- Japanese Hot Springs: Culture and Beliefs in the Northern Tohoku  
District through the Descriptions of Masumi Sugae in the Edo Period  
..... Michio ISHIKAWA ( 1 )

- The Chemical Characteristics of Hot Spring Waters Discovered  
Traditionally by Wild Animals – Considerations of Previous Research  
and Data Represented by Kono --  
..... Yasuo KANROJI (13)

### Research Notes

- The Development of Spa Tourism in Sankamphaeng, Thailand  
.....Tatsuo URA Takaki KOBORI Mitsuteru NAKAYAMA Jariwat PHOLPHANTIP (25)
- Tourism and Spa Management after the Great East Japan Earthquake and Tsunami  
in the Northern Tohoku District  
..... Kiyokazu TANIGUCHI (31)

### Symposium

- The Way for Recovery from the Great East Japan Earthquake and Tsunami ..... (37)

### Book Review

- Nobuyuki KOSEKI · Angela SCHOH 『Introduction of Kurort (Health Spa)』  
..... Junji YAMAMURA (49)
- Junji YAMAMURA 『Research Reports on Spa』 ..... Tatsuo URA (50)

### News on Spa

- Cutting Costs by Saving: the Example of HANAYAMA Spa  
..... Masatoshi NISHIGUCHI (51)
- A Visit to Aachen Spa ..... Yuji AKAIKE (53)

- Notes and News ..... (55)

Regional Science Association of Spa, Japan

c/o Department of Tourism, Josai International University, Kamogawa 299-2862, Japan